

社会教育の理論と実践

——金沢大学社会教育研究室研究員として——

金沢大学医療技術短期大学部教授
元 金沢大学教育学部教授
元 金沢大学社会教育研究室研究員

沢 田 忠 治

社会教育の理論と実践

金沢大学医療技術短期大学教授
元 金沢大学教育学部教授
元 金沢大学社会教育研究室研究員

沢 田 忠 治

目 次

一、社会心理学研究部会の運営

―社会教育に於ける学習グループの育成法―

二、金沢大学開放講座にとりあげた課題

第一課題 自我論

(1) 自我の意義

(2) 自我の発達

(3) 自我の教育

第二課題 家庭教育の任務

(1) 生活の基本的しつけ

(2) 人格・性格の基礎づくり

(3) よい人間関係の練習

(4) 学校生活の補助的役割

(5) やさしい心情と宗教的情操を育てる

第三課題 乳幼児期の心理としつけ

(1) おとぎの世界

(2) 「うそ」と「ぬすみ」

(3) わがまま

(4) まねっ子

(5) 好奇心

(6) すなおさ

(7) 人格・性格の基礎づくり

第四課題 精神衛生上からみた戦後の親子関係

(1) 家庭と子ども

(2) 母と子どもの関係

(3) 父と子どもの関係

第五課題 児童期の心理と家庭教育

(1) 嘘と盗み

(2) 現実の世界

- (3) 元氣旺盛
 - (4) 記憶力
 - (5) 徒党時代
 - (6) 心の開放性
 - (7) 批判力・判断力
- 第六課題 正しい叱り方と正しいほめ方
- (1) 叱り方
 - (2) ほめ方
- 第七課題 青年期の心理とその取扱い方
- (1) 青年期の区分
 - (2) 身体的成長
 - (3) 性教育
 - (4) 青年の基本的要求と取扱い方
 - (5) 青年の心理的特質と取扱い方
- 第八課題 成人期（男子）の心理
- 第九課題 成人男子と社会教育
- 第十課題 高令者の心理と教育
- 第十一課題 社会教育と生涯教育
- (1) 生涯教育の意義
 - (2) 生涯教育の必要性
 - (3) 生涯教育の課題
 - (4) 今後の社会教育のめざす人間

第十二課題 随想 生活と「ことば」
第十三課題 記録

豊かなる愛情は人間の宝

—大学生の自殺—

序

私は昭和三十四年から、昭和四十九年まで、金沢大学社会教育研究室の연구원として、十六年間、ささやかな歩みを続けて来た。

その間、当研究室の諸行事に参加して、体験した、社会教育の理論と実践の一部分を記して、諸賢の御批判を賜りたいと思う。

私の担当した、主なる研究部会は、社会心理学研究部会であった。その外に、青少年問題研究部会、公民館問題研究部会、婦人問題研究部会、総合講座、大学開放地方講座、及び各地域の社会教育調査などに参加した。

なお、昭和四十四年度から四十七年度まで、同研究室の主事として研究室の運営にあたった。

この十六年間、一貫して精魂を傾けたのは、社会心理学研究部会の指導である。

一、社会心理学研究部会

この研究部会の発足は昭和三十四年度からである。それ以来、研究生として、同部会に参加した者は、毎年四、五十名位で、延べ凡そ六百名余りである。

研究生の中には、会社員、官庁職員、学校教師、学生、主婦、老人、社会教育関係職員など、老若男女、学歴を問わず、学びたい意欲を持ち、通学可能な人々のすべてを網羅したのである。

I 学習の形式は、テキストを中心に講義と話し合い形式である。

テキストの選定は、年度始めに、研究室と相談の上、決定した。

これまで使用したテキストは次の通りである。

- 昭和三十四年度 南 博著。社会心理学入門
- 〃 三十五年度 宮城音弥著。社会心理学入門
- 〃 三十六年度 講 現代心理学。人間関係の心理
- 〃 三十七年度 宮城音弥著。社会心理学入門
- 〃 三十八年度 千輪浩監修。社会心理学
- 〃 三十九年度 南 博著。社会心理学入門
- 〃 四十年 依田新著。青年心理学
- 〃 四十一年度 南 博著。社会心理学入門
- 〃 四十二年 南 博著。社会心理学入門
- 〃 四十三年 講 現代社会心理学。異常社会の心理

昭和四十四年度 南 博著。日本人の心理

〃 四十五年 千輪浩監修。社会心理学

〃 四十六年度 南 博著。社会心理学入門

〃 四十七年度 南 博著。社会心理学入門

〃 四十八年度 千輪浩監修。社会心理学

〃 四十九年度 千輪浩監修。社会心理学

最初は入門書を多く使用し、最近は千輪浩監修「社会心理学」を使用した。

II 研究会のもち方に特に留意した点

(1) テキスト選定について

社会教育において、学習会を育成するために、第一に考慮すべきことは、テキストの選定である。

テキストは前述の如く、社会心理学に関する書籍をできるだけ多数集めておき、研究生相互の話し合いによって、選択・決定した。これに反して、指導者がテキストを先に選定して置き、一方的に学習者に押しつける方法は、社会教育の場合、望ましくない。

それは学習者の学習意欲を高め、あるいは低めることに関係があるからである。

(2) 研究会の進め方

最初、三ヶ年間は、毎回、先に研究生に研究領域を割り当て、研究を命じておき、その領域の要旨、問題点を発表

させるという、ゼミナール形式で実施したが、次第に出席者は減少する傾向を示したのである。

この出席者数の減少の原因は何かを考えてみると成人は学習の方法を忘れており、学習に縁遠くなり、それに加えて、成人はそれぞれ自己の本職を持っており、多忙のために準備が充分でなく、自分の責任を果し得ず、他人の面前に恥をかきたくないという心理的条件も加わって、出席が心の負担になる様子が見えたのである。そのためこの方式を変更せざるを得なくなった。しかし、極めて熱心な数名の研究生が育ってきて、他人の分担領域まで引き受けたり、高価な社会心理学の専門書や大きな辞書などを購入して積極的に研究を進めはじめた研究者も育ってきたのである。

一般的に成人の社会教育の学習会を育成するには、恥をかかせない思いやりのある取扱いが最も大切であることを確認した。

その後、研究会の持ち方を次のように変更した。研究の暇のない者には、無理強いをしない、希望者のみに割り当てることとした。これも長く続かなかつた。それは割り当てを受けない者が、引け目を感じ、遠慮の気分が見えてきたからである。

そこで更に次のように変更した。研修の場で順番に一節

位づつ読むだけにした。この時に、次の指示を与えた。

「決して上手に読もうとか、早く読もうとかと考えず、読めない字があれば、教えますから、下手でも少しづつ読んでいただきます。なお、日が悪かったり、声の出ない人は遠慮なく辞退して下さい。」と、

その結果、老人の方々も非常に嬉しそうに活気を示した。少し読んで、自分もこの学習に参加しているのだという満足感と喜びが湧き起るからである。それから欠席者は減少し、参加者は毎回ふえて、各部会の最多数になった。

成人の社会教育における小グループの学習指導の要諦は、こんなところにあると思われる。

(3) 討議上の考慮点

テキストの内容は、可成り理論的で、専門的語句があるため、理解が困難であるので、その理論を日常生活の具体的な問題と関連づけることに重点をおき、説明の時、話し合いつつ返えしながら、研究会を進行したのである。

この討議には、個人の独断意見・個人の広告・自慢話ができるだけ押え、つねに、正邪善悪・合理・非合理を判断の規準にして、討議を進めたのである。

この時も、個人攻撃を押え、人に恥をかかせないように、皆で注意し合うよう仕向けたのである。

(4) 満足感を与える

次に考慮した点は、毎回参加する会員は、それぞれ多忙な時間をさいて、遠方からわざわざ出席することを考え、出席してよかった。という満足感を与えるように努力したことである。これこそ、学習意欲の動機づけ、出席の意欲を高めるための最大条件である。

(5) 学習の日時の選定と時間厳守

学習日時を選定は会員が集るのに最も都合のよい曜日と時刻とを、学習者全員で決定した。指導者自身の都合は第二義的条件とした。したがって、最も多数の者が出席可能な日時は、土曜日の午後一時半から四時半までとなり、開始と終了は時間厳守で実施した。

社会教育に必要な条件は、時間厳守である。

(6) 連絡・通報

欠席者に対しては、次回はテキストの何頁の第何章・何節からであると、学習内容の進捗の連絡に努めた。

(7) 記録

毎回の出席者の氏名と学習内容の要点、討議の中心議題を会員が順送りで記録簿に記録し、学習進捗の状況を明らかにした。

(8) 部会活動の発表

金沢大学社会教育研究室の活動状況を年間に四季に分け

て、季報を発刊した。

この季報に、部会の学習記録を中心にして、部会の活動状況を公表したのである。

この季報によって、他の部会の活動状況を知り、自分の部会活動も他の部会の研究員・研究生に知らせたのである。

(9) 会員相互の親睦

部会の会員相互の人間関係を深めるためにハイキング、お茶会、共同調査、社会見学、などを実施し、親睦・友好を高め、楽しいグループ作りに努力した。

以上は研究部会指導上の注意点の概要である。

二、大学開放講座にとりあげた

課題の一部

当研究室の活動の特色として、地域社会の発展のために大学を開放しよう、開かれた大学として、大学の近代化をめざして、昭和三十六年度から地方に開放講座を開設したのである。

この講座は年度毎に異った一つの中心テーマを設定して、各研究員が自己の専門領域から中心テーマに対して、それぞれ違った角度からアプローチするという方法をとった。

過去十数年間、私は教育心理学・社会心理学の立場からアプローチした。社会教育の場における各種団体、集會に

は、公民館活動、PTA・婦人会・青年会・老人会・職場の研修会・各地域の趣味の会・子供会・ボーイスカウト・ガールスカウト等々の会が活動している。

その中で、成人の集会で最も関心と欲求の高い問題は、子どものしつけ、教育の問題である。職場においては、青年の心理、職場の人間関係が関心度の高い問題である。

このような社会的要請をふまえて、青少年の教育、青年の心理について種々の課題を設定して、地域の要望にしたがって、開放講座に望んだのである。

その開設講座の課題の中の一部分を、年令的段階を追って、その講座の内容を次に述べてみたいと思う。

最初に取り上げた課題は、自我論である。

第一課題 自我論

① 自我の意義

自我は人間の内面的・中核的なものとして考えられるが、その意義は多種多様である。

学者、学派によって異り、今日でも、まだ統一的な見解はないようである。オールポート (G.W.Allport) は現代心理学の自我の概念の代表的なものを八つ取り上げて評論しているのは有名であるが、今ここでその問題にふれずに、サイモンズ (Synmonds, P.M.) とミード (Mead, G.H.) の説をとりあげることにする。

サイモンズは、主体としての自我を (ego) とし、客体としての自我を (self) として区別している。(ego) は人間の行動を選択したり、決心をするもので、内的欲求を満足するために、外界への適応を決定する主体である。

(self) は主体によって観察され、反応されるものとして、身体や精神的過程に関連するものと考えている。そして、(ego) は行為するもの、思考するもの、観察するものであり、(self) は観察されるものであって、発達上 (ego) は (self) より早くあらわれるとみている。

ミードは自我を主語的私 (I) と客語的私 (me) とに区別している。客語的私 (me) は他人との人間関係の交渉によって、成長するものであり、主語的私 (I) は客語的私 (me) にたえず反応し、行為していくものであり、主語的私において、行為の新奇性・創造性がみとめられるのである。

要するに、自我は人間の中核的領域で、態度・観念・動機・価値などを含むもので、人間の成長には、つねに自我の成長が考慮されなければならない。

特に教育においては、人間の主体性が尊重され、自主性、自発性、自律性が学習指導や生活指導の原理におかれるので、そこにはいつも自我が関与する。

そのため、父母、教師はおのおの子供の成長を観察し、

それぞれに応じた指導方法を考慮すべきである。望ましい調和的な客語的私の形成によって社会に適應させるとともに主語的私の創造性を培い、自己なりの価値を実現させなければならぬ。

② 自我の発達

a 乳児期の自我

生まれたばかりの新生児には自我と名づけられるべき心のはたつきは見られない。

新生児は性別上の差異や成長的個体差があるだけで、どの子も同じような行動をする。すなわち、まばたき、あくび、くしゃみ、吸乳、でたらめな反射運動だけであるが、六ヶ月位になると身体の動かし方、泣き方、微笑などにそれぞれ特殊な反応を示しはじめる。又興奮と沈静、満足と不満足、喜びと怒りなどの情緒の分化も、子どもごとに異なってくる。さらに手を出す、泣く、叫ぶなどして目標物を得ようとする。ここに漠然とした自我の機能があらわれはじめる。

生後六ヶ月頃には原始的利己心としての自我の自己主張がみられ、自分の欲求をみたすために役立つ事物や人をおすかながら区別しはじめる。引き続き離乳や排泄のしつけをうけ、身体運動が十分行なわれないために種々の苦痛を受けるなどして、彼等の生活はフラストレーションの連

続となる。

こうして自分の身体と環境との間の区別をおすかながら感じはじめる。

自分の身体が外界を動かす一つの力をもっていることをおぼえる時期は、生後九ヶ月から一年四ヶ月であるといわれる。人生最初の自我は身体的なものを通じて発生するが、原始的自我は生後六ヶ月から一年の間に発生するといわれる。特に生理的欲求と結びついている母親の存在は乳児にとって最も重大な関心事であり、原始的自我の人間関係の認知は母親である。

人間関係の最初は泣くとか、微笑するとかの方法によって、自分の欲求を他人に訴えようとつとめはじめる。その対象の最初は母親である。要するに、自我は乳児期に発生するのである。

b 幼児期の自我

こどもは幼児期にはいと、自分の行動が母親を喜ばせたり、悲しませたりすることを母親の顔色をみて鋭敏に読みとるようになる。

幼児が母親の望みをかなえた時には、母親の顔は喜びとなり、そうでない時には失望の色の浮ぶのをみる。そして彼らは、母親の愛情を得たいと思えば、ゆっくりとではあるが自分の内部の欲求と闘いはじめ、母親の願望を満たす

努力をするのである。

幼児は原始的利己心から起る、本能的・衝動的に起るわがままを押えて、母の命令や禁止に対してすなおに行動して、母親の愛情をつなぎとめようとする。すなわち、かかる心理過程の中には、すでに欲求が二つ以上あって、互いに対立しあっているのである。生理的・本能的な欲求を別の欲求である「母親に愛されたい欲求」によって抑えつけられるのである。この時の子供の自我は、外界との接触によって、自我の原始的衝動が阻止されながら形成される自我である。

同時に父母の命令・禁止や理想像を自分の中に攝取して、自分の内部に良心に当る超自我 (Super-ego) が形成されてくる。

こうした自我は、外からの力(父母の命令・禁止・社会の規則・行動の節制・思考の様式・社会的態度)と超自我と生理的・本能的・原始的欲求の三者の關係によって形成されるのである。こうした意味から自我はクンフリクトの場の構造において作られるのである。子供のしつけの根本は幼児期にあるという心理的根拠はここにある。

超自我(良心)の成立以後は、自分の欲望のあるものは社会的にゆるされること、ゆるされないことを知り、自分を「よい子、悪い子」として自己評価しはじめる。

超自我は時には自分を叱責し、抑圧するので、幼児はあんな種々の不安をもつ。

特に離乳や排泄の敵しすぎる母親の場合、母親から拒否されるのではないかという不安にかられる。また新しく生まれた弟妹にのみ氣をとられている母親に対して不安を感じ、弟妹に対する憎しみや嫉妬心を抱くのである。

幼児の示す種々の自己表現、たとえば自我主張の強い子と弱い子、依存心の強い子と独立心の強い子、進攻的な子と逃避的な子などは、ほとんどが親の養育態度によって形成された幼児の自我の自己表現と見なされる。このように自我は、自己表現をするものである。

一般的に幼児期は自己を表現する場合に反抗という形をとる。これがいわゆる第一反抗期である。

c 児童期の自我

児童期になると、幼児の頃に比較して、急速に生活領域が拡大してくる。その一つ一つの生活の場面で、自分はいつものように自己表現をしたらよいか、という課題が与えられている。このことが児童期の自我の中心課題なのである。

本来の自我(ego)は中心で、場面場面で役割と役割期待を、になっている自己を(self)とすれば、この自己(self)は自我(ego)の展開されたものである。

たとえば、ある三年生の男の子Aは、両親の前では「息子としてのA」、祖父母の前では「孫としてのA」、弟妹の前では「お兄ちゃんとしてのA」、先生の前では「生徒としてのA」、同級生の前では「級長としてのA」などというように、たくさんの自己 (self) をもっている。

そして人は、自己の社会的な地位にふさわしく行動することが期待され、要求されているのである。

児童期は家族・学級などの人間関係をとおして、自分などのように行動すべきかを学習し、自分がその集団の中で占める地位を自覚し、何んとかして、多くの人々の期待や要求に副いいたいと努力しはじめるのである。

小学校三、四年生頃になると仲間意識が強まり、いわゆる徒党時代 (gang age) を形成するのである。

学習意欲も知識欲も強くなり、友人関係も深くなり、愛情や尊敬を感じる人、強い人、時には恐怖を感じる人と自己同一視することによって自我の強化と拡大をはかる。

子供たちは現実には不満をもつ場合、空想の世界で思い切り自我を拡大する。

この頃は成人への背のびをし、成人の社会に入りこみたがっている。現実の自我の弱さに不満を感じ、空想的でもよいから、もっと自我を強いものにし、拡大したいと思っているのである。数人の仲間と固く結びつき、大人との間

にかべを作り、冒険的・秘密的な社会組織を作り活動をす、これこそ彼らの自我が求めている世界なのである。

児童期の自我は幼児期や青年期の自我に比較して最も安定した自我を形成する時期である。

それは、精神的発達と肉体的発達が調和的に堅実に成長する時期であるからでもある。

d 青年期の自我

安定していた児童期の自我も、青年期になると内からと外からの刺激によって、次第に混乱し、分裂を起しはじめる。更に、この混乱し、分裂した自我の再構造化が行なわれる時期でもある。

自我と超自我、外界との対立相剋は激化し今までのような単純平穏な自我のあり方では生活してゆけなくなり、自我は分裂する。分裂した後、再構成がなされる。

青年の自我は、他我に対して敏感である。すなわち、他人の存在、他人の感情、他人の自分に対する思わくなどに敏感になる。

青年の自己主張は他我との対立から生ずる。また、青年の自我には自己劣等感、萎縮感、自己優越感、自信など自己評価による満足、不満足という強い自我感情があらわれる。

さらに青年の自我の特質は、自我の内部に、理想我と現

実我とが分裂し、対立しあって自己批判が行なわれる。

このようにして青年の精神的自我は確立していき、自我の自覚が成立するのである。

青年の自我は理想我と現実我、中心層と周辺層とに分化し、各々の領域には各種の欲求があり、強いエネルギーをもっている、それらの欲求は融合・対立・抗争を生ずる。

たとえば、性的欲求、求知心、名誉欲、倫理感などその好例である。

性的欲求が起ると、一方それを抑えようとする超自我による倫理的な感情も強まってくる。そのため青年は簡単に性的欲求を満たすことはできない。欲求と欲求の間にコンフリクトが激化すると、自我の内部に混乱が生ずる。

自我の分裂感、青年期の自我意識の特色である。青年はかかる分裂から救われようとして、統一を求め、悩みを克服するために努力する。そのためにある青年は、哲学書、宗教書、人生論を読みふけり、ある者は芸術の道を選び、ある者は政治運動、スポーツなど外的活動によって、自己の統一を求めるのである。

こうした自我の混乱も、青年後期以後には徐々に安定し、統一されて、自己同一視ができるようになる。

③ 自我の教育

自我は人間の中核をなすものであるから、人間の成長・

発達には、つねに自我の成長・発達が考慮されねばならない。したがって、子供の教育においては、おのおの子供の自我の成長を観察し、それに応じた指導方法がとらるべきである。

前にも述べたように今日の子供の教育には、子供の主体性が尊重され、自主性・自発性・自己活動が学習指導や生活指導の原理となっている。そこにはいつも子供の自我が関与しているのである。

子供の教育上、主語的私^{アイ}の創造性を働かせて自己活動を行わせ、自己に価値を実現させることと、他人と調和的な客語的私^イを形成させて、社会に適応できるようにすることが、今日教育上最も重要な目標である。

このような自我教育を行う場合に、配慮しなければならぬ二、三の点にふれてみよう。

その第一は乳幼児期の問題である。乳幼児期には、あたたい母親の愛情と心の安定感が与えられなければならない。乳幼児期の自我の不安感や拒否されているとの感じと母の愛情を得られないことは、問題行動の発生の根本原因となる。

第二は、幼児期・児童期を通じて、自己活動、現実における豊かな経験が必要である。自己活動と経験が乏しければ、自我の発達は不十分に終るのである。特に大人の過保

護や親の溺愛は子供の自我の発達を損う結果となる。

第三に、周囲の人は子供に自我を傷つけるような観念を与えてはならない。積極的に周囲の人々がその子供によい認識を与えるようにすべきである。この意味で、賞讃と叱責の仕方が適当か否かは重要な問題となる。

常に「駄目だ」「駄目だ」と非難され、叱責されている子供は自己劣等感に陥る。劣等感とは精神発達をおくらせ、人格をも破壊する。

第四にフラストレーションに対する正しい指導が必要である。人はだれでも、ある程度のフラストレーションに陥るものである。このフラストレーション・トランス（欲求阻止の耐忍性）の養成に注意し、自己批判・自己評価・自己統制などの育成が必要である。

要するに、健康な自我の育成は、幼少期から自分の事は自分でするという強い独立的な自我の自律性からはっきりした自他の区別、他人との親密感、人格の統一感などが組合わされて出来る上である。

子供の教育は、自我の成長・発達に即し、自由意思や自尊心、自律性、自発性を育てていくことに向けられなければならない。

第二課題 家庭教育の任務

子供の教育は家庭、幼稚園、学校、近隣社会などのそれぞれの担当者が、互いに連絡し、協調し、協力して進めていかなければ、その効果を十分にあげることができないのは明瞭である。今日、青少年の非行や犯罪の増加するにつれ、その原因が問題となっている。

非行・犯罪を侵す青少年を育てたのは家庭教育にあるとする者、学校教育にあるとする者、一般社会の中にあるとする者など異った論議がある。そこで、子供の教育上、家庭の責任は何か、学校の責任は何か、一般社会の責任は何か、これらの責任分担は明確に区別は困難であるが、強いておれば各領域における主たる任務があるであろう、という観点から家庭では、子供の教育・しつけの面で如何なる任務があるかについて、考察したいと思う。

家庭教育の主たる任務には五本の柱が考えられる。

第一は、子供の生活の基本的しつけをすること。

第二は、人間の人格・性格の基礎を作る。

第三は、よい人間関係の練習をさせる。

第四は、学校生活の補助をする。

第五は、やさしさと宗教的情操をそだてる。などである。この五本の柱については、次のような内容が含まれている。

① 生活の基本的しつけ

生活の基本的しつけとは、生活の基本になる習慣形成であつて、人間は一生涯、身につけていなければならない生活の型である。

これは幼児期から毎日の生活の中で、規則的に繰り返されて、自然に身につく行動の型である。これは社会のもつ文化に適応して生活していくために必要なものであり、心身ともに健康に、調和的に発達していくために必要な生活の型である。

このしつけの中に主なるものが五つある。それは食事・睡眠・排泄・着衣・清潔である。

a 食事 食事について、乳児では授乳の仕方と離乳が問題であり、幼児・児童では偏食と分量と作法とが問題点である。

食事は子どもの健康に直接関係していることと、食事という行動や機会を通じて子どもは社会的・対人的経験をつんでいくので、食事中に他人に不愉快な思いをさせない態度を身につけさせることも大切なしつけである。

食事の習慣をつくるには、離乳期からはじめなければならぬ。この頃からいろいろの食物の味や香になれさせることが必要で、二才位には一定の時間に、一定量食べるように仕向け、与えられたものは好き嫌いなく愉快に行儀よく食べる習慣をつける必要がある。このころに好きなものの

みを選ばせると、次第に偏食の習慣ができてくる。

偏食の原因は、子どもの体質からきているものもあるが、育児上の不注意に由来するものも決して少なくない。その原因の第一は、甘やかしである。また親が偏食にあまり敏感になつて、過度に気を配つたり、子どもにおもねたり、小言をいって叱つたりすると、ますます食べたがらなくなる。

偏食を矯正するには、食物の味・香りなどになれさせ、嫌いなものでも、少量づつ必ずがまんして食べるように仕向けてゆき、調理の方法も工夫することである。

b 睡眠 睡眠は最も有効な休息であり、それによつて疲労が回復し、新しいエネルギーが造られる。成長する子どもの生活において、重要な意味をもっている。

よい睡眠の習慣とは、一定の時刻になったら喜んで一人で床につき、充分の時間熟睡し、一定の時刻に機嫌よく起床することである。

睡眠に障害を与える条件には、過度の空腹や満腹、騒音や照明、尿意、就寝前の強い興奮や恐怖心などがあげられる。

さらに、睡眠そのものの障害として、夜ふかし、寝つきが悪さ、眠りの浅さ、寝ごと、夜驚、夢中行、夜尿、朝寝などがある。

これらの障害に対しては、それぞれの原因を確かめ、気
長な努力と工夫によって改善していかなければならない。

c 排便 排尿・排便は健康を保持するために欠くこと
のできないことで、幼児期から正しい習慣をつける必要が
ある。この習慣形成は、おむつの離脱から始め、自分で便
所に行き、後しまつができるようになることが目標で、幼
児期のしつけの重要なものである。

排便の習慣で問題になる点は夜尿・頻尿・便所恐怖など
である。

これらの問題を持つ子どもは、神経質な子どもに多く、
それらはやがて、情緒的不安・劣等感などの原因になるこ
とが多いので、その取扱いは慎重でなければならぬ。

d 着衣 着衣についての大体の標準は、つぎのよう
である。二才位で一人で着物を脱ごうとする。三才頃で一人
で着ようとする。四才位で帽子をかぶり、前ボタンをかけ
たり、両そでを通し、靴下をはく。五才で一人で着衣を脱
ぎ、紐を前でむすぶことができるようになる。六才では一
人で服装の着脱ができるようになる。大体、この標準で、
その年令に応じ着衣の習慣をつくることにより、自分のこ
とは自分でするという、自主性の萌芽を培っていくべきで
ある。

e 清潔 三才で手を洗うことができ、四才ではうがい

をしたり、歯をみがき、はなをかみ、顔を洗うことができ
る、五才で髪をとかすことができるのが普通とされてい
る。

幼児は不潔なことに無関心で、むしろ、不潔なごろんこ
遊びを喜ぶものである。この頃に、手足がよごれたら気にか
かり、それを洗い落とすとか、鼻汁が出たら、気にかか
り自分で始末し、朝、洗面する習慣を作ることが大切であ
る。要は、美的情操の萌芽を育てる必要がある。

② 人格・性格の基礎づくり

家庭における子どもの教育には二つの教育作用を通して
行なわれる。その一つは親が、意図的・計画的に子どもを
しつけ、教育する作用と、他は子どもが家庭内の雰囲気や
親の自然の生活態度から知らず識らず学びとるといふ自然
的形成作用である。

幼児期は人格・性格形成の第一段階である。

この頃に知的・身体的・社会的・情緒的な発達の基礎が
できる時代である。殊に情緒の発達は乳児期において分化
し始め、幼児期にはいと著しく分化する。

ブリッジェス (Bridges, K.M.B.) の研究によれば、情
緒の分化は生後三ヶ月から分化し始め、二才頃にはかなり
はっきりした形をとり、大体五才頃までには、基本的な情
緒はほとんど現われ、それ以後精細に高次に発達していく

間関係が温かで、平和で、愛情に満ちたものであれば、幼児期から他の子どもとの関係も、大人との関係も愛情をもって結びつこうとするのである。

これに反して、家族との関係は冷たく、拒否的であれば、他人との人間関係は反抗的、攻撃的となり、冷淡になったりするのである。

この意味で、家族間の人間関係を平和で、愛情にみちた雰囲気での関係を作って、子供を養育する必要がある。

④ 学校生活の補助的役割

学校生活は、幼稚園や保育所や家庭生活とは異り、緊張にみちた生活である。

幼児期の遊びの生活に比較して、児童期は学習中心の生活であるからである。

先づ、一定の時間、一定の教室で、一定の机に向い、一定の椅子に坐っていないなければならない。その他、いろいろの規則にしばられ、先生の命令・指導に従がわなければならない。

同年輩の友人が周囲に沢山いて、時には意見の衝突があつて喧嘩になることもある。

これらすべては緊張の原因になる。

人間は緊張すればするほど疲労するのである。

初めて小学校一年に入学した児童が、午前中二時間程の

授業を終えて、帰宅すると、今までの幼稚園から帰って来た時に比較して、非常に疲労して帰って来るのである。そのため、入学後数ヶ月でノイローゼ傾向を示す子どももある。

それが一日五時間、六時間の授業を受けて一生懸命学習して来た子供は、大変つかれるのである。このような子どもは家庭に帰ってからは不気嫌で、反抗的で、攻撃的になる。

これは学校でのフラストレーションを家で発散するのである。

この時、家庭では学校のような緊張を再度強いてはならない。

家庭は心身のつかれを治療し、慰安の場とならなければならない。

そのためには、多少のわがままは許し、叱責や非難はできるだけひかえ、栄養を与え、充分の睡眠と心の休養を与えることにとめることが、学校生活の補助的役割である。

その外に、学校学習の予習・復習の場であることは、いうまでもないことである。

⑤ やさしい豊かな心情と宗教的情操を育てる。

戦後、わが国の家庭教育で、両親が子供に示して欲しい

善良な模範は数多くあるが、その中で特に強調したいことは、次の二点である。

第一は老人をいたわる、親孝行の模範である。戦前の日本は君に対する忠義とともに孝行が最高の道徳原理であった。終戦後は学校において孝行については一言も触れられず、価値体系から消えてしまった感がある。

民主教育を説くものはこのような旧道徳を否定することに急であつて、孝行のように親の意志に縛られず子どもが自分の意志で動くことが正しい民主的な行動だと教えている。

牛島義友氏の研究によれば、「お父さんやお母さんを助けるためなら、自分はどうなってもかまいません」という質問を日本、ドイツ、イギリス、フランスの小学校六年生の児童に与えて、その答えを発表している。それに依れば、「はい」と答えた児童は日本は五六・六%、ドイツは九一・五%、イギリスは九七・七%、フランスは九七・七%となっている。日本のこの数字は反省させるものを多分にもっている、と氏は述べている。

両親が老人をいたわり、親を大切にしているのを子どもは見れば、子どもは祖父母を尊敬し、同情し、大切にしようとするものである。親は親不孝の模範を示せば、やがて、自分に親不孝となつて返ってくる。両親は自分の祖父母を大切に

するとともに、他の老人に対しても、いたわり、尊敬し、親切にして、子どもによい模範を示すべきである。

第二は、宗教意識の養成のため、祖先をまつり、神仏に対する行事を実行して、よい模範を示して欲しいということである。

これについて、ペスタロッチーは次のように述べている。「純粋で一点の私も交えない母の愛は、愛の極致であり、この母の愛に、はぐくまれていく間に、自然に、愛・感謝・信頼・服従などの道徳的感情が幼児に発生し、これらの感情に、神に対する愛と信頼の最初の萌芽が宿る。

母と子との関係と、神と神の子である人間との関係の類比に基づき、幼児は早くから、神の何たるかを内感し、母の宗教的感情は、日々刻々に子女へ暗示的に作用し、母に対する愛・信頼・感謝などは自然に神にうつされる。即ち、宗教的感情が自然にめばえ育つてゆくものである」と、これこそ彼が家庭教育を礼賛するもつとも重要な理由であると説いている。

敗戦後、わが国の家庭教育の中に欠如しているものは、宗教的な基礎の上に育成される道徳心であると思われる。宗教的意識・敬虔心・信頼感・感謝などの道徳心は、先の孝行と同様に、学校教育にのみまかせられるものではなく、これこそ各自の家庭において、善良な両親の模範によつて、

養成すべきものである。

第三課題 乳幼児期の心理としつけ

② おとぎの世界

乳幼児の心理的世界は、現実的な大人の心理世界と異なっており、空想の世界、夢のような世界である。たとえは、お人形の口もとへ、お菓子を押しつけて食べさせようしたり、一本の棒切れも、ある時は剣に考え、またがれば馬と考えるのである。また幼児の描いた「おかあさんの像」は、頭でっかちで、頭の巾は肩巾よりも、はるかに広い。これは母親の一番大切な所を大きく表現する心理のあらわれで、胴や手足は、どうでもよいのである。

このような絵は空想の絵であって、このような絵をえがく期間は、かなり長い間つづくものである。

幼児のこのような絵を見て、母親があれこれ注意したり、変だと批判してはならない。

幼児がよろこんでこのような絵を描いているその活動が尊いので、文句をいわずに、ほめながら静かに見守ってやるべきである。

幼児はよく何か面白いお話をして欲しいと母に要求する。この要求は空想の世界・想像の世界に遊びたいためである。

童話や寓話はすべて現実の世界とはかけはなれた、夢の世界の物語である。

この要求に対して面倒がらずに、時々お話をしてやる父母と、忙しいからといって、この要求をみたしてやらない父母とでは、子どもの将来の発達に大きな開きができる。

お話を聞いて、無心に空想の世界に遊ぶうちに、子どもに、種々の知識・情操・心の働きが発達する。反対に、お話を聞けない子どもは、心の栄養があたえられないことになる。

幼児期は、同じ内容の話を何回聞いても喜び、ときには話の先回りをして、喜んで聞いてくれるものである。ただ、話の内容は残酷なものや、あまり恐ろしいものはさけなければならぬ。明るい、面白い話を豊富に与えて、思うぞんぶん空想の世界に遊ばせてやるのが大切である。母親の自作の話でも結構である。

② 「うそ」と「盗み」

幼児の頃にはよく嘘をいうことがある。

それは考え方が未熟で、言うことと行いとが一致しなかったり、記憶力は弱いから、以前に言ったこと、したことから、後に言うことやすることとが、ちぐはぐになるからである。また、自分が思ったことを、実際にあったことのように表現するのである。

それを大人が聞くと嘘をいったとなるのである。この嘘の中には悪意はないので、この種の幼児の嘘を心理的嘘と
いって、道徳的善悪の対象にはならないのである。

また、幼児は盗みをするのである。

たとえば、お隣の家へ遊びに行つて、そこに自分の欲しい玩具があると、帰りに無断で持ち帰ることが往々にある。それは盗みと見られる。この頃は自分の物と他人の物の区別がつかず、自己中心的で欲しかったから持つて来たのであつて、他人の物を無断で持つて来ることが悪いという分別がないからである。

この頃のこの種の盗みも道徳的善悪の対象にはならないのである。

しかし、親として、わが子が他人の物を無断で持ち帰つて来たことがわかつていても、道徳的評価の対象にならないからといって、放任しておいてはならない。

そんな時にこそ、他人の物と自分の物との区別、取扱いのしつけをつけ始めなければならぬ。嘘についても、悪意の嘘がわかつた時には、嘘はいけないことのしつけをしなければならぬ。

③ わがままっ子—自己中心性—

幼児は自分を中心に考え、他人のことを考えないで、つねに、自分本位に行動する。

たとえば、自分の気にいった玩具は一人占めにし、欲しいお菓子はだれにも分け与えようとはしない。このような性質を自己中心性という。この自己中心性は、わがままとなつてあらわれる。このわがままの取扱いが、幼児期のしつけの中心課題である。

幼児期に、このわがままの総べてを許して、甘やかして育ててしまうと、取り返しのつかない青年になつていくのである。

それで二才頃から、許す事と許さない事とを、はっきりけじめをつけて、取り扱うことが大切である。

幼児期に自分の要求をすべて叶えられた人にはわがまま者が多いのである。

人間に必要な心の心棒は要求阻止の耐忍性である。この耐忍性とは、自分の欲望や衝動を抑える克己心のことである。

人間は皆、欲望の「かたまり」である。この欲望の虜にならず、自制し、統制する心の強さをもつて、人の道を歩まなければならぬ。

その心を養う最初は、幼児の頃のしつけにあるのであつて、あまやかされた、一人っ子、長子、末っ子、病弱な子、年寄っ子などにわがままものが多いといわれる。それは幼時からフラストレートの経験がなく、耐忍度が発達してい

ないからである。

要するに、子どもの欲求と外界とが時折、衝突するのである。この衝突をどのように処理さすかが問題である。親が問題を処理してやるのではなく、二才頃から徐々に温い愛と励ましによって、自分の力で困難を乗り越えることができるように訓練を始めることである。

④ まねっ子

幼児はきわめてまねが上手である。幼児は父母、兄弟の言葉・動作をまねて、その生活様式を身につけながら、家庭生活に参加するのである。幼児のママゴトは、すべて家族のまねである。「子どもは親の鏡である」と、いわれるように、幼児の言動から、その子の父母の性格や生活態度を推察できる。

幼児は自分の両親は最上のもの、完全なものと思っている。この頃の両親は子どもの外部的良心の役目をする。したがって、父母の模範が、子供の人間形成に重要な条件になる。善良な家庭の雰囲気と親の善良な模範によってよい子は育つのである。

模倣遊びは、三才以前の幼児にかなり多く見られ、三、四才から五、六才の間に一層多く行われる。

前述した如く、幼児期には、やさしい心情と宗教的な情操の基礎を作ることが大切である。その方法は、両親の善

良な模範により特に母親の模範が大切である。

⑤ 好奇心

幼児は、見るなといえれば一そうみたがり、さわるなといえれば、よけいさわりたいがり、あけるなといえれば、よけいにあけたがる。このような気持を好奇心という。珍らしいものにぶつかると、好奇心が一そう湧いてくる。

幼児の好奇心がもっとも早くみられるのは、生後八ヶ月位からだといわれている。

遣いはじめた赤ん坊が、ひき出しや戸棚をあけて、中のものをひっぱり出したり、もう少し大きくなると、障子に孔をあけてのぞくということは、よくみられるすがたである。

このような好奇心が、言葉の現われるにつれて質問の形をとってくる。

二才半ぐらいで、すでに未知を明らかにしようとする質問が現われる。この頃には、「なに」「どこ」「だれ」などど名前をきくものが多く、三、四才頃になると、「なぜ」「どうして」という質問が多くなってくる。この「なぜ」「どうして」という質問は、新しい疑問と、自分がすでに知っている知識や感情とを、自分の納得のいくように統一しようとする努力のあらわれであって、「なに」という質問よりも質的に高度なものである。

幼児のこの好奇心・疑問・質問こそ広く深く知識を求め
る原動力になるもので、知的発達に対する大きな役割を
もっているものである。こういう点から、好奇心は人間に
与えられた貴重な宝ということが出来る。

科学教育といい、知育という、その根底になる動力は、
幼児期・児童期のこの好奇心にあるのである。したがって
子どもに真に知識を求めさせ、理解力を得させようとする
ならば、この好奇心をもっとも大切に育てなくてはならな
い。

そのためには、次から次へと数限りない幼児の質問に対
して、うるさがらず、しからずに、わかる程度に親切に答
えてやると同時に、質問の態度を賞讃し、奨励し、暗示を
与えて深く誘導してやる必要がある。

さらにただ言葉で答えるだけでなく、子ども自身に行な
わせ、問題の解決の喜び、理解の満足を味わせることも大
切である。

幼児期に得た知識・経験はやがて小学校に入学してから
の学習の基礎になる。それと共に物事に疑問をもち、その
疑問を積極的に解決しようとする意欲を育てることは、家
庭教育の重要な任務である。

このような任務は母親だけで果たせるものではない、家
庭の大人達全体と兄弟の協力があって、初めて効果をあげ

うるのである。

⑥ 従順さのしつけ

幼児は生後十ヶ月頃から、自分の行動が母親を喜ばせた
り、悲しませたりすることを、母親の表情から読みとるよ
うになる。

幼児は自分が母親の望みをかなえた時には、母親の顔に
喜びと感謝の色が浮かび、そうでない時には失望の色が浮
かぶのをみわけるといふ。彼らは、母親の愛情をつないで
いきたいと思えば、ゆっくりとはあるが、母親の願望を
彼ら自身のものに融合していく。

彼らは、自分と母親の願望とを同一視して、自分の内部
の欲求に対して闘いはじめめる。

すなわち、自分の「生理的・本能的・原始的欲求」を
「母親に愛されたい欲求」によって抑えつけるのである。

この闘いによって、原始的衝動、欲求が押えられ、母の
命令・禁止に服し、従順な態度が養成される。母の命令・
禁止によって、してよいこと、して悪いことの判断の芽が
育つのである。すなわち、自分の心の中に良心にあたる超
自我が、次第に形成される。

超自我（良心）の萌芽が育った後は、自分の欲望のある
ものが、反社会的性質をもっていることを知り、自分を
「よい子・悪い子」として、自己評価しはじめめる。

このような幼児期の原始的欲求を抑制し、父母の命令・禁止を理解し、従順な態度の基本になる超自我（良心）を育てることは、人間教育の最初に重要な課題である。

⑦ 人格・性格の基礎づくり

人の人格の基本的な枠は五才ごろまでの生育史によって一応つくられ、その後の発展はこの基礎の上に形成されるという。

ことに精神分析学派などは、幼児期の経験が人格の形成に対して決定的な意味をもつと主張している。

前にもふれた如く、人間の人格・性格の中核をなすものは、その人の情意の形態である。ブリッジエスの説によれば、生後五才頃までに、大体、成人のもっているすべての情緒があらわれるという。

興奮は最も早く新生児に現われ、怒り、嫌悪、恐怖、不快などは生後六ヶ月頃に現われ、嫉妬心などは生後一八ヶ月頃にあらわれるという。

これらのどの情緒についても、その興奮が強すぎることは、健全な行動の発現をさまたげるものである。

情緒について必要なことは、正しい発達と安定性である。この正しい発達とは、それぞれの感情が適当な対象に結びつき、喜ぶべき時に喜び、悲しむべきことを悲しみ、恐るべきことを恐れることであり、安定性とはある程度、それ

ぞれの感情をおさえることができる状態をいう。

情緒の健全、不健全は、人格の健全、不健全の基礎になる。

情緒の中心、特に問題になるのは、愛情に対する満足、不満足と否定的情緒、すなわち、怒り、恐怖、憎悪、ねたみ、悲しみなどであり、これらの情緒を幼児期に極端に爆発させ続けるならば、不健康な精神状態になり、性格もゆがんでくるのである。

それ故、幼児期の情緒を、どのように取扱ったかが、その人の人格・性格の基礎作りに重大な意味をもつものである。たとえば、出生時の異状や未熟児の出生、あるいは子どもの重病などのため、母親が子どもの養育に自信を失った場合は、過保護になりやすい。

母親の過保護は神経質な子どもや虚弱児をつくり、世話のやきすぎから落着きのない子、引込み思案の子どもがでさる。

怒りっぽい母親に養なわれた子どもは、幼いときから反抗的な、防禦的な行動傾向の子どもとなるといわれている。それ故、いつもいらさせたり、悲しませたり、淋しがらせたり、恐れさせたり、ねたませたりしないで、温い愛情によって、情緒の安定性をたもたせ、困難な問題に接したときに、ただ怒ったり、悲しんだり、恐れたりしてい

るだけでは問題を正しく解決できないことを知らせ、問題解決の正しい方法・態度を徐々に習得させることが必要である。

第四課題 精神衛生上からみた戦後の親子関係

―幼児期中心―

① 家庭と子ども

戦後、わが国の家庭は、両親と子どもとからなる二世大家族、すなわち、核家族化が次第に多くなり、年寄りを含む三世大家族、すなわち、複合家族が次第に減少してきている。

その割合は正確につかむことは困難であるが、ある学者の推定では、核家族は $\frac{1}{3}$ になったといっている。

この外に、両親のいづれか一方、あるいは両方が欠けている欠損家庭も多数ある。欠損家庭の子どもは社会・国家から援助を受けなければならぬ場合が多い。また、欠損家庭の子どもの中で児童福祉施設の乳児院、保育園、養護施設にあづけられて、昼夜保育、養護を受けている子どもがある。この外に、両親があつても、施設にあづけられる子どももある。これらの子どもを施設児と呼んでいる。

この施設に育てられることの可否について種々の論議が交わされている。

最近、女性の社会的進出が顕著になり、普通の家庭の子

どもも社会施設にあづけられて保育、養護がなされる機運が高まってきた。

それに対して、精神医学者、心理学者、教育学者の間に問題にされてきていることは、家庭及び、母親から離されて施設で保育、養護を受けている子どもの身体的欠陥、精神的欠陥が生ずるといふ一連の研究である。

児童精神医学者のスピッツやボルビーなど幾多の研究がある。彼等の研究の結論は「いかなるよい施設といえども、悪い家庭に劣る。」ということである。

これらの研究の結果、イギリスでは保育所を減らし、養護施設をできるだけ家庭的にするため小舎制にし、あるいは里親制度にする行政がとられ、欧州各国では、この研究結果に賛意を表するものが多くなったといわれている。

保育所の保育は子どもに、自律の習慣をつけたり、社会性をつけるのには、家庭の保育にまさる長所がある、にもかかわらず、上記の結論がでることは、一体なぜであろうか。

その答えを一言でいえば、三才以下の乳幼児に特に必要なものは、母の愛情への要求を満たしてやることである。

この子どもの切実な要求を施設では充分に満たしてやれないからである。

牛島義友氏の研究によれば、ある乳児保育所（ナース

リー・ルーム)において、ホスピタリズム(施設病—母性愛の欠乏から起る心身の病状)に特に心を使い、つとめて子どもにマザーリングや身体的接触をするようにつとめていられるにもかかわらず、保育行動は家庭の場合に較べて、1・3にすぎなく、特別の配慮のない普通の乳児院や養護施設では、保育行動は、一般家庭の場合の1・5にすぎなかった、と報告されている。

② 母親と子どもの関係

母親は古い時代においては育児の中心的人物であったものが、戦後は、母親は社会的な仕事に意義を見出し、育児に対する関心が薄れてきている。そのため、家庭は子どもにとって温かい「巢」ではなくなってきた。

施設は家庭に近づけようという努力を重ねてきている。

母親は子どもにとって最も緊密な存在であることは勿論である。妊娠と授乳という直接の身体関係を通じ、さらに毎日の愛撫と養育を通じて、子どもとの密接な人間関係が形成される。

子どもは乳房から乳汁を吸引し、その際の満足感と快適な抱かれ方(肉体的接触)によって、心の安定感を得るのである。乳児にとって、極楽の心境は母に抱かれて咽喉を鳴らしながら乳を吸っている時であろう。

かくして、乳児は愛情と心の安定感を与えてくれる母の

存在を認識するようになる。

子どもの聴覚が発達すると声による母の存在を知る。さらに視覚の発達によって、母の存在を知り、母と他者との区別ができるようになる。このようにして母と子どもとの関係は着々と形成されていく。

ここに必要なのは母と子どもとの肉体的接触である。母は肉体を通して愛情と心の安定感を与えることが必要である。このことが人格形成の第一の条件となり、精神衛生の問題点である。

母親の側でいかに子どもを愛する心があっても、子どもとの、肉体的接触がなければ母の愛情は子どもに通じないのである。子どもは幼なれば幼い程、抽象的な愛情を受けられる能力がないのである。

したがって、直接的な身体との接触の必要な乳児期(生後一ヶ月間)が、母子関係にとって極めて重要な時期であり、それに引き続く幼児期も、肉体的接触による母の愛情と子どもの心の安定感が与えられたか否かが、その人の人格・性格の基礎を作ると考えられている。

この頃の養育に失敗した子どもの中に「自閉症児」といわれる子どもがある。

それは感覚の発達が見られていても、母親との感情関係を成立させる能力を欠いているため母親を認識することが

少なく、あやしても笑わず、一人にしておいても母親を求めることがなく、他人がいてもそれに反応しなくなる。このような対人感情の喪失された状態が養護施設などに起きる状態をホスピタリズムと名づけている。

普通の家庭においても、精神病の母親や子どもを拒否したり、無関心な母親に育てられた子どもの中に、その程度の差はあるが、この種の子どもができるのである。

母子関係は、まず、母性意識が根本で、それが愛情と結合して母性愛となると考えられる。この母性愛は女性の本質的なものである。

しかし、この母性意識・母性愛は今日の機械文明の隆盛と、社会情勢の変化につれて、稀薄化する傾向を辿っている。母親は自分の生活を中心に考えて、子どもをほしげらず、子どもが生まれても関心を示さず、時には他人や公共の施設に養育してもらうことを希望し、あるいは、自分に備わっている授乳器官（乳房）からの授乳を拒み、ミルクで育てようとし、その他の養育は機械的となりつつある。このような母親は次第にその数を増し、そのため、子どもは異常行動を示したり、非行に走る子どもの増加が指摘されている。

更に、今日の子どもの衣・食・玩具はすべて機械によって大量生産された製品であり、それらによって育児、養育

がなされ、母親の真心のこもった自らの手造りによるものが次第に減少してきた。

また、子どもを適当に産み、その数を制限する、その後には母親自身の行動を子どもによって束縛されたくないという意識が存在している。極端になると子どもを殺す親が最近非常に多くなった。このような時代的変遷の中に、疎外され、拒否される子どもが多く、これらの子どもは精神的に健康な子どもとなるのである。

他方、少数の子どもを産み、子どもの知能を高め、有名校に入れ、あるいは稽古事に通わせることに夢中になる母親がある。

このような母親は、自己の名誉心、虚栄心、利己心の強い母親といふことができる。

この利己心の強い母親は、自分の要求にそわない子どもを拒否したり、自己の責任を他に転嫁したり、子どもの教育を他人にまかせ切ったりする。

この名誉心、利己心の強い母親には、その原因が二つ考えられる。その一つは、母親の生育史の中に幾多の不幸が存在していたことである。母親が育った家庭内で各種の葛藤があった場合、その母親の経験に不安があり、心の底にわだかまりをもっている場合である。

その二は、現在の家庭生活の中で、夫との精神的結合に

不安があり、不調和である場合である。これらの場合、母親の精神、身体上に時には病的症状を起こさせたり、あるいは異常行動が養育態度に現われてくる、その結果、過保護、不当干渉、拒否などの態度となり、その養育態度は子どもを不安に導き、精神的健康を共にそこない、母子関係は失調する。

家庭内で子どもの精神健康を問題にする場合、母親の問題が根本である。

③ 父親と子どもの関係

古い時代には、父親は家庭では權威的存在であって、子どもとの直接的なふれ合いは少なかつた。

現代では僻地や封建性の強い地方では、その状態がまだみられるが、若い世代においては、父親は家事・育児に協力、参加する分量が増加し、子どもとの直接的なふれ合いが多くなつた。この傾向はわが国のみでなく、欧米諸国においても同様な傾向にあるといわれている。

この傾向は、女性（母親）の社会的進出と併行しており、その代りに父親の家庭内における役割が増加している。

新しい家庭、とくに共稼ぎ家庭においては、夫婦の育児に対する協力的体制の確立によって、子どもの精神的安定が得られるわけである。夫婦の協力、精神的結合は、母親の精神的安定をもたらす、それが母親の育児態度を安定させ

る基本であるからである。

したがって、父親はこの点に配慮し、妻の精神的安定を維持するように努力しなければならない。

もし、夫が自己中心的で、我儘で、専制的であつたり、拒否的態度をもって妻に接した場合、妻に不安が生じ、それが子どもに反映して、子どもの精神的健康が害されることになる。このような問題の夫は、妻の場合と同じように、夫の生育史の中にゆがみをもっている場合に生ずる。たとえば、夫が子ども時代に、過保護で、甘やかされ、わがまま仕放題に育てられると、自己中心性が性格の中核となつて形成されてくる。反面、両親から拒否され、冷淡に取り扱われた場合には、非社会性・反社会性が性格の中核となつた人間が作られてくる。

この問題は知的能力とか、社会的地位とはあまり関係なく、家庭という場における行動として現われる場合が多い。夫婦の精神的結合が得られず、家庭の崩壊にいたつた例は少くない。そのような場合の子どもの不安は大きく、子どもの異常行動が起ることが多い。しかし、たとえ崩壊した家庭の中で育つた子どもでも、母親が立派で、あるいは父親は立派で、先をよく見越し、合理的に正しく生産的の方向に生活を進めて、子どもの立派な人格形成に成功した例も少くない。

両親の異常から、家庭的不幸な経験の結果、異常行動を示しながら成長した人は、結婚後も再び不幸な結婚生活を展開する例が多い。

このようなことを家庭の歴史的連続性と呼んでいる。このような悪循環を断絶するためにも、両親は子どもの問題を中心として、子どもの精神的健康の維持のために努力する必要がある。

よい家庭には、よい家庭の歴史的連続性が維持されている。このようなよい家庭に育った人間は結婚の相手に対する決意も正しく、生活態度にも調和が保たれ、心身の発達も順調で夫婦の精神的結合は緊密である。

最後に、子どもの精神的健康や人格形成に、親子の関係が強く影響すると思われるその時期は、子どもは何才頃であるかについては、適確な解答は今後の研究にまつ外ないが、筆者は乳幼児期と思春期の自我の発達の顕著な時期が最も重要であると考えている。

精神衛生上の家族の人間関係については、この外に、兄弟・姉妹関係と祖父母と孫の関係を考慮すべきであるが、それについては後の機会にゆずることにする。

第五課題 児童期の心理と家庭教育

① 嘘と盗み

青少年の犯罪の中で、最も多いのは盗みである。この防

止対策は、幼児期から母親が立てる必要がある。前述の如く、幼児は自分のものと、他人のものとの区別がなく、他人のものを無断で持ち帰る。また、幼児はよく嘘をいう。しかし幼児の嘘は心理的嘘といって、盗みと同様に善悪の評価の対象にはしない。しかし、犯罪は嘘から始まるとか、犯罪の裏には必ず嘘があるというように、幼児期から嘘や盗みはよくないことを教えさとすことが肝要である。

やがて、小学校一年生頃になると、心の中に二つの部屋ができてくる。すなわち、良心の部屋と悪心の部屋の分化が生じ、心の中に秘密をもちはじめ。そして、悪いと知りながら他人のものを盗み、それをかくすために嘘をいうようになる。換言すれば、この頃から良心の声を聞きはじめるのである。

それ故、小学校一年生頃の嘘と盗みのしつけが、きわめて大切である。

五、六才の子どもが盗みをしたり、嘘をいったりして、自分の良心の苛責に責められている時、外部の両親のきびしい叱責を受けて、悪事を後悔し、今後、こんなことは、決してしないぞ、という決心ができて、はじめてしつけが成功するのである。

このようなしつけは、一度で成功する場合もあれば、二度、三度と回を重ね、繰り返かえして成功する場合もあろう。

多くの場合は、幾度も回を重ねて成功するものである。

ここにしつけの一貫性がある。

このような悪の芽は、早ければ早いほど、つみとることが容易であって、これを放置しておき、回を重ねるにしたがって、悪心の部屋が次第に拡大し、良心の声が聞こえなくなつて、ついに、不良行為、悪の習慣化が生ずるのである。戦後の家庭教育では、このしつけが不徹底で、青少年の不良化を増加させたのである。

② 空想の世界から現実の世界へ

小学校一、二年生の頃の心理は、幼児期の延長で、まだ空想の世界、想像の世界の名残りをとどめているが、三年生頃から次第に分化し、発達して、現実の世界へ眼が開かれるようになる。したがって、三、四年生頃から興味や関心は、次第に、自分の生活している周囲に生息している動・植物や自然物・自然現象・機械や器具などに向かつてくる。

読みものも少年・少女物語、探険・冒険小説、旅行記・伝記・歴史物語・科学の書物へと進んでいく。また、児童は一般に、物を集めることが好きである。子どもの机の引き出しの中には、さまざまなお道具や機械の部分品などが乱雑に集められている。何を集めるかは、周囲の環境の影響をうけるものであるが、たいていはあまり価値のあるも

のではない。つまり何をあつめるかでなく、集めること自体に興味があるのである。これは児童の興味外界に向かつてきたことを示すのであつて、一面、科学する心の現われとみることが出来る。したがつて、集めているものが、大人の目からみて価値のないつまらないものであつても、けなしてしまふことはよくないわけで、むしろそれを教育的に利用していくようにしむけるべきである。

このように次第に現実を認識するようになる。この現実認識の発達は、ゆたかな家庭の子どもよりも、貧しい家庭の子どもの方が、はやく発達するものである。その原因は、ゆたかな家庭の子どもは、自分の希望や欲望を父母の力によつて容易にかなえてもらえることが多い。ところが、貧しい家庭の子どもは、欲しい物もなかなか買つてもらえず、立派な欲しい品物の代りに、安物の貧弱な品で我慢させられることが多い。そのため、希望と現実是一致せず、現実界のきびしさは自分の欲望で動かすことができないことを早く知るのである。それ故、旅行や遠足の時の持物や学用品について高価な品物や必要以上の物を欲しがらる場合には、叱らずに、よく説明してやれば安いもので我慢し、不相応なものを欲しがらずに納得するようになる。三、四年生以後には、このようになるのは現実認識ができるからである。この頃には、子どもは自分の家庭の経済について、漠然と

知るようになる。

この頃に経済的な安定感を与えることが大切である。それには家庭の貧富や収入の多少ではなく、子どもが家庭の経済をいかに感じているかという感じ方が、その基礎になっている。

特に両親が、金銭・品物に対して如何に感じ、如何に取扱っているかの二点が、子どもの将来の経済生活に大きな影響を与えるものであるという。

③ 元氣旺盛——(じっとしてられない)

小学生時代は、身体の発育と精神の発達とは大体平衡を保って発達していて、その速度は定常的で安定した時代である。

この発育の速度が急速な時期は、身体が不安定となり、病気に罹り易く、死亡率も高くなる。すなわち、発育のめつとも急速な乳児期の死亡率が最高で、幼児期はそれにつぎ、九、十、十一才ごろに最低となる。そのうちでも女児は十歳、男児は十一才がめつとも死亡率の低い年齢である。児童期には、各種の運動能力や感覚器管も比較的定常的な発達をとげる。

知能の発達は誕生から十一、二才頃までは、年齢の増加とともに大体、直線的に発達する。これは主として脳の発達が比較的定常的、直線的であることにもとづくものと考

えられる。

児童期は、山野をかけめぐり、木登り、かけっこ、ブランコのり、自転車のり、野球、縄跳び、人形遊びなどに熱中する。目の覚めている間はしばらくも静止できず、常に活動しつづける。

人間の一生の中で一番元氣旺盛な時期である。しかも一日の活動によって生ずる精神的、肉体的疲労も、一晚熟睡すれば完全に恢復する。

それゆえこの頃は、学習に、遊びに、めつとも適した時期である。学習児と呼ばれる所以はそこにある。

この元氣旺盛な学童にとつても、学校生活は精神的、肉体的にきわめて疲労するものである。幼児期の自由でままな遊び中心の幼稚園や家庭生活とは異り、一定の規律のもとに、時間と場所の制約を受け、教師に指導されて学習し、学友との共同生活をするとなると、児童はたえず緊張を強いられる。

この緊張の場は、学習のために必要である。知識を獲得させ、教師の教訓を守らせるためには効果的である。

こうして緊張すればするほど、精神的疲労が加わるのである。つかれをきらう子どもは学習中緊張せず、注意を集中しない、したがって学習の効果も少い。授業中一生懸命に注意を集中し、緊張して授業を受けた子どもは、すっか

り疲れて家庭に帰ってくる。そのうめあわせとして、家庭では不気嫌で、わがままも、自由も、あまえもでてくるのである。

そこで家庭は子どもの緊張をほぐし、疲労を回復させる、慰安の場、治療の場でなければならぬ。そのためには、家庭は十分な栄養と睡眠と心の休養、安定感をあたえて、翌日再び元氣よく登校させることが、母親の重要な任務である。

決して、家庭は学校と同様な緊張感を子どもに与えてはならない。

④ よくおぼえる―記憶力旺盛―

われわれは見たたり聞いたりしたことを、ある期間たつてから思い出すことができる。このように一度経験したことを、ある期間もちこたえる作用を記憶という。

幼児の記憶は感情の影響が強く、具体的なものを記憶し、抽象的なものは記憶しにくい。また、全体的な記憶の仕方をするのが特徴である。すなわち、歌をうたうときも、数字を暗誦するときも、途中からはできず、初めからやりなおすのはそのためである。

児童期に入っても、一年生頃は幼児期の特徴がまだのこっている。八才頃から十才ごろに記憶力は著しい発達をする。この頃は記憶の材料の意味や構造を分析せずに、その

ままうのみにする機械的記憶が強く、自動車の型や野球選手の背番号などを、よく暗記している。

記憶する際に、材料を目でみておぼえやすい者を視覚型の人、耳できいておぼえやすい者を聴覚型の人という。更に、運動を通じておぼえやすい者を運動型という。

人によってどの型に属するかのがいはあるが、純粋に視覚のみ、聴覚のみという人はなく、大ていの人はそのらの型が混合しているのが普通であつて、どちらが得意かという比較的強い面につけた区分である。

更に、児童期において、大体九才頃までは聴覚の方が視覚よりもおぼえられやすい傾向があり、九才を過ぎると、この傾向は逆になるといわれている。

学校の学習には、どうしても記憶しておかなければならない材料が随分多いのである。

それで記憶力の旺盛な児童期に、学習の基礎になる材料を、しっかりと身につけさせておく必要がある。学習を指導する際に注意すべきことは、記憶の型にしたがうこと、心を緊張させ、注意を集中させること、できるだけ多くの感覚器管を利用すること、更に一旦学習したことを、反復練習させて、しっかりと身につけさせることである。

たとえば、記憶する材料を声を出して読み（視覚、運動感覚）それを聴き（聴覚）、文字に書く（運動感覚）など

し、もし実験のできる材料ならば手にふれてみる（触覚）
匂いを嗅ぐことができれば、匂いを嗅いでみる（嗅覚）、
味わえるものなら、味わってみれば（味覚）一層効果的だ
ある。こうして経験したことを、何回か繰り返かえせば、記
憶は一そう確実になる。

最近学習指導において重要な意味をもっているドリルと
いうのは、こういう意味での反復練習のことである。

したがって、家庭の教育的な任務の一つは、学校での学
習の補助的役割があるが、それは学校で学んだことを、家
庭で反復練習することが本体である。

⑤ ギャング時代—徒党時代—

小学校へ入学した当時は、児童相互の関係はバラバラで、
各人がそれぞれ担任教師と直接のつながりをもとうとする
が、三、四年生になると、一つの学級の中にいくつかな
かよしのグループができ、それぞれ組織的な行動をするよ
うになる。こういう集団員は、それぞれ強固な結びつきが
出来、排他的な徒党となることが多い。

徒党は児童は男児、女児は女児ではつきりわかれ、女児
の場合は男児ほど結合は強くなく、リーダーもはつきりし
ていない。

この頃は「われわれ」という集団意識が強固になり、協
同心が生じ、力の関係がもっとも強く現われてくる。そし

て個人的な勝敗よりも、集団としての勝敗をより多く問題
とする。集団相互の競争、対立が強くなる。

この時期をギャング・エイジ（徒党時代）という。徒党
の生活は、仲間への誠実や従順や責任や正直などの道徳意
識を著しく発達させるとともに、自己の欲求やわがままを
抑制して、約束を守り、仲間と折りあっていくなどの社会
的能力をも発達させるのである。

反面、悪友の影響によって、よいしつけがくずされる場
合もある。

したがって、この時期において、よい友人を選択して、
子どもたちを十分に集団の中に生活させ、その集団生活を
通して、自分がその集団の中に占める地位を自覚させたり、
多くの人々の期待や要求に副うためには、いかに行動すべ
きかのような社会的技能を獲得させ、前述の道徳性、社会
性を養成させるように教育することが大切である。この頃
の子どもを持つ母親は自分の子どもだけをよくしようとせ
ず、集団の子供達全体を皆の母親が協力して善導するとい
う心掛けが大切である。特にリーダーの質を考慮しなけれ
ばならない。

⑥ 心が開かれている

児童期は、常に注意を外部に向けている。学級内では教
師や学友に注意を向け、家庭内では父母や兄弟に向けて、

自己自身の内部には注意を向けないのである。したがって、児童期は自己に対する悩みや煩悶がない。

この心の扉を外に向って開いている。したがって、何事でも胸襟を開いて他人に話しができ、他からの話を素直に受け入れるのである。たとえば、家庭内の事件を、教師に口頭や作文で報告し、学級内のできごとを詳細に両親に話すのである。

この心の開放性が、教師や両親から教えられることを、よく聞き入れるもつとで、教育の準備態勢ができていることを示す。それ故、児童期がもつとも教育し易い時期である。また、この頃は両親や教師を尊敬し、信頼している時期であるので、親や教師は子供を右に曲げ、左に曲げることが容易である。したがって、正しく、真直ぐなよい子供に育てようとするならば、両親も教師も、正しく、真直ぐな模範と態度が必要である。教師、両親が正しく教え導いて、立派な人格形成の基礎を確立すべきである。

この時期を過ぎ中学二年生頃になると、次第に注意を自分の内面に向け、心が閉鎖的になり、殻の中に閉じこもり、心の中に秘密をもち始め、親の前にもあまりものを言わなくなってくる。こうして自己の内面に注意が向かってくる。自己自身に対する悩みや煩悶が生じ、時には自殺の原因ともなる。このような点が、児童期と青年期ともつとも顕

著な相異点の一つである。

⑦ りくつをいう — 批判力・判断力 —

一般に小学生は、両親や先生に対して絶対信頼的態度をもっているが、しかし、五、六年生になるとよく理屈をいい、父母、先生を批判し、時には反抗したりする。

これはある程度、批判力・判断力がついて来、成長してきた証拠である。

どこの子どもも家庭や学校で、父母や先生に認められたい、愛されたいとの強い要求をもっている。この要求が満たされず、他人に比して自分が無視され、愛されていないと感じた時には、心が不安定になり、父母や先生を嫌い、反抗心が起るのである。

さらに、子どもの感情が無視され、不当に叱られ、誤解に基づく叱責などの場合には、この傾向は一層強化するのである。

また、親や先生の感情的な好き嫌いによって、子どもをえこひいきした場合には、不公平な親、不公平な先生として、するどい批判、非難の対象になる。

この意味で、家庭や学級内で不公平な取扱いは、子ども相互間に憎悪・嫉妬・憤怒・反感・対立などの感情を生じ、子どもの心を不安にし、かきみだすのである。その結果、学級では教師を嫌い、学習を嫌い、学校を嫌うようになる。

家庭では父母を嫌い、粗暴・反抗・家出などが発生するのである。

それ故、この時期には父母、教師は、すべての子どもに公平な態度、取扱いが必要である。あるPTAの会合で、某母親から次のような質問を受けたことがある。

「私の家には三人の男の子どもがあり、三人とも公平に取扱って育てているのですが、二番目の子はひねくれていて、ことごとくに反抗し、時には乱暴し、勉強もせず、成績が悪くて困っております。どうしたらよいでしょうか。」と、この質問は、親は子どもを公平に取扱っていると思つても、子ども自身は公平に取扱われていると思わないところに原因があると思われる。多分、この二番目の子どもは、心の中では、自分が不公平な取扱いをされていると考えているのであろう。さらに、この子どもを叱つたり、注意したりする時に、上と下の子どもを引き合いに出して、いつも比較している点に問題があるようである。

家庭において子どもに注意をしたり、叱つたり、ほめたりする場合に、兄弟や近所の友だちと比較をしないことが大切である。その子どもは、その子なりの美点をほめ、欠点をいましめるべきである。

またある父親の発言に次のようなのがあつた。

「わたくしの次男が、〇〇先生に受持たれてからは勉強

がちつとも面白くないし、学校へ行くのがいやになつたというので、その理由をききだしたところ、〇〇先生はぼくの発言を少しもとりあげてくれないし、指名もしてくれない。どうもぼくをにくんでいるのだ。という。それで、学級懇談会に出席して、先生の話を書くと、「あなたの子どもさんは、反抗心が強くて困ります」といわれて、どうしようかと困っております」と、

この例のように、学校内で教師と生徒との人間関係が円満でなく、そのため生徒は学習を嫌い、学校を嫌う子どもは可成り多いようである。こういう師弟の関係は、最初ちよつとした誤解から起る場合が多く、その誤解をとかない限り、日増しにその関係が悪化していくものである。そんな場合、父母はその誤解をできるだけ早期に解いてやるよう努める必要がある。

なお教師は生徒の一、二回の言動をみて、この子はこうだと早急な判断や結論をくだすべきではなく、幾度も見直して、親切に、愛情をもって、欠点を直してやるべきである。

現在の学校教育でもっとも教師が注意すべきことは、優れた生徒も劣つた生徒も、進学希望者も、就職希望者も、差別することなく、一視平等、公平に取扱い、各生徒の長所をみとめ、欠点を矯正して、どの子どもにも、あの先生

に愛されているという気持ちをもたせることである。

第六課題 正しい叱り方と正しいほめ方

子どもの性格形成上、親の叱り方とほめ方が重大な影響を与えるものである。

P T Aや婦人会の集会で、しばしば次のような質問を受けることがある。

「どうも、うちの子どもは、わたくしのいうことを、ちつとも聞かないで困ります。叱れば叱るほど、口答えしたり、乱暴したり、腹を立てたりします。なにか、よい方法がないものでしょうか。」と、

なるほど、母親が朝から晩まで、大きな声で叱っているが、子どもが少しも母親のいうことをきかない家庭がある。これに反して、子どもを叱る声など少しもきこえないのに、子どもが非常に素直で、よく母親のいうことをきく家庭とあるのを、日常よく見かける。

このような差異は、ほめ方と叱り方の問題にあると考えられる。

子どものしつけの方法として、叱るとはめることが、どんな家庭にも用いられる。幼児期のしつけには、悪い欲望を起した時に、みだりに叱ったり、禁じたりしないで、注意を他の方へ転換させることが、一番よい方法といわれている。それは幼児は暗示にかかり易いから、注意の転換は

比較的容易に行なわれる。たとえば、泣いている子に玩具を与えると泣きやむように、抑圧するよりも転換することの方がよいわけである。ところが、小学生頃になると、叱る必要がでてくるのである。

① しかり方

よい叱り方とはどんな叱り方であろうか。叱る時に注意しなければならぬ条件は何かの問題について、次にふれてみよう。

a、子どもを叱る場合の規準は、常に正邪善悪を基準にして、人間の守るべきルールに反した時に叱るべきで、決して、損得を基準にして叱ってはならない。

b、邪悪な行為を見つけたら、直ちに叱ること、時間的間隔が長ければ長いほど、効果は減少するものである。とくに幼少の子どもには、この注意が肝要である。

c、感情が激している時に叱ってはならない。また自分の気分で叱ってはならない。自分の怒りの感情や不満を、子どもに投げつけてはならない。叱る時には、できるだけ感情を冷静にするように努力すべきである。

感情の激した時には、正しい叱り方ができず、つい言い過ぎたり、荒々しくなったり、時には、叱る目標がそれたりするものである。目標のそれた叱り方は、子どもに反抗心を起こさせ、逆の結果をまねくものである。

d、叱る前に、子どもの言い分、理由を聞いてやるだけの余裕をもちたいものである。

子どもには、子どもなりの言い分がある。

その理由の中で、行為の動機が善で、結果が悪の場合がある。そんな場合には、叱ることをさしひかえる必要も起る。動機がよくて、子どもの思慮が不足、手段方法が未熟なため、結果が悪くなった場合、叱られると、今後、積極的によい行為をしようとする気力をくじき、退嬰的、消極的な性格ができるからである。

e、叱り方に一貫性が必要である。

同じ非行は何時でも、何処でも叱り、注意することである。自分の家庭内と車中や他家とで差異があったり、昨日は叱られ、今日は見逃がされるようでは、子どものしつけは不徹底になる。

f、大人の協力

子どもを叱って、よいしつけをするためには、家庭内の大人達が、同一規準で、一致協力することが大切である。

母親が叱っていることに對し、父親や祖父母が、無関心の態度や反対の態度を示すようでは、よいしつけはできない。g、公平な叱り方

非行や悪事は、だれがしても、平等に同程度に叱るべきである。長幼男女の差によって、叱ったり、見逃したり、

差別をつけてはならない。もちろん、子どもの性格を考慮することは大切である。

h、他の子どもと比較しない

叱る場合、他の子どもと比較してはならない。その子ども独自の非行について叱るべきである。いつも他の子どもと比較して、叱っていると、自然に劣等感を植えつけることになる。

i、叱ることを吟味し、できるだけ回数を少くすること。

小言ばかりいっている母親は、大切な時に、子どもをしたがわせられない。叱ってばかりいると、子どもに反抗心を起こさせ、劣等感をつくり、ついには自暴自棄の行為をなさしめる結果にもなる。

j、叱る場合、毒舌を慎しみ、いいきかせ、悪をさとし、

反省させるようにすること。

短い言葉で、毅然たる態度で叱り、子どもが非行・悪事を悔い、今後ふたたび悪行を繰り返すまいという決心をつくらせること。

k、叱った後、反省の色が見えた時、できるだけ早く忘れ去ること。

忘れない場合は、子どもはいつまでも叱られている心持になる。

l、体罰は否定

子どもをしつけるために、体罰を用いることを、次の理由で否定する。

(イ) 体罰は一種の暴力である。民主々義の時代に暴力は否定すべきである。

(ロ) 体罰はあまりに動物的である。動物をしつける場合に体罰を用いる。それは動物は人間の言語を理解できないからこれを用いる。子どもは皆、言語の理解ができる。言語を用いて、気永に言い聞かせてしつけるべきである。

(ハ) 鞭打たれば、鞭打たれる程、鞭に対して鈍感になる。鞭に対して鈍感な子どもを育てることは非教育的である。

(ニ) 愛の鞭という言葉があるが、愛するが故に鞭打つということは、欺瞞的自己弁護である。鞭打つ時の感情はにくしみの感情である。

m、フランスの母親の叱る時

ヨーロッパの教育事情視察中に、フランスの母親は家庭で厳しい叱り方をする、聞いて来た。それは子どもがどんなことをした時かと尋ねたら、次の五項目の解答を得た。

(イ) 他人の物を盗んだ時

(ロ) 嘘をついて悪をごまかした時

(ハ) 他人に迷惑をかけた時

(ニ) 公衆の規則を破った時

(ホ) 自分の義務を果さなかった時

このことは、日本の家庭教育で参考にしたことであり、特に(ハ)の「他人に迷惑をかけた時」に叱られる。この項を見習いたいと思う。

② ほめ方

一般社会において、社会の秩序を破ったものは罰せられなければならないし、罰に対する法律があるが、賞についての法律はない。

それは法律の必要を認めないからである。子どものしつけに対する賞と罰も同様で、子どもが当然しなければならぬことをしなかつたり、してはならないことをした時には、叱る必要があるが、これに反して、当然しなければならぬことをしたからといって、いちいちほめる必要もないし、ほめもしないであろう。

それでは、家庭で子どもが最もよくほめられる場合は、どんな時であろうか。「家事の手伝」「おるすばんをした時」「勉強をよくした時」あるいは「服従」「整理整頓」「道徳」「作法」などに関して、よい行為があった場合である。

ほめる時に、よくつかわれる言葉は何か。「近ごろとてもおもしろくなったね。」「このごろよく勉強するよう

になったね。」「そういうことは、これからどんどんしなさいよ。」というように、子どものよい習慣的行動を激励するほめ方と、「よくやったわね。」「りっぱだったよ。」「えらかったわね。」「がんばったわね。」のように、賞賛と是認を与えるもの、更に「ありがとう。」「よくしてくれただね。また、これからお願ひするね。」「よく気がついてくれたわね。」「お手伝ひしてくれてたすかったよ。」などのような感謝と賞賛を現わすものがある。

さらに効果的なのは、以上のごとく言葉でほめながら、手で頭をなでてやる方法である。これは子どもが大変、喜ぶ方法である。

このようなほめ方が、いずれも子どもたちに、喜びと満足の感情を味あわせ、よい行為の奨励になった時に、賞賛の効果が現われるのである。

ほめ方で注意すべきことは、子どもの善い行為や努力のあらわれた時に、ほめてやることである。更に、言葉だけの是認と賞賛で、十分満足するように、日常、子どもをなれざすことが大切である。

決して、ほめることと、金銭や品物とを交換しないことである。それは、お金や品物をもらわないと、よい行為ができない子どもをつくる危険があるからである。

もちろん、幼少な頃には、いずれの家庭にも、ある程度、

しつけの方便として、この方法を使用するものであるが、習慣化を警戒すべきである。

第七課題 青年期の心理とその取扱い方

講義のねらい

今日、家庭・学校・職場において、青年をいかに理解し、どのように取扱ったらよいかは最も困難な問題として論議されている。

すなわち、「最近の青年は何を考えているのかわからない」とか、「青年と成人との考え方にずれがあり、心理的溝がある、この溝をどのようにしてうめたらよいかわからない」となどよく耳にする。

これらの問題を解決するためには、先ず第一に成人が青年期の心理を理解することが先決の問題であると思う。そのため、成人の方々に、青年期の一般的心理の理解に多少とも参考になればと思ひこの講義題目を選定した。

① 青年期の区分

青年期の区分は学者によって二期に分ける者と、三期に分ける者とがある。ここでは日本の学校制度に則り、三期（前期・中期・後期）に区分する。前期は大体中学生時代、反抗期であつて、客観的なものに反抗するとともに、自己についても強い自信のもてない時期（12才―14才）。中期

は大体高校生時代、ある程度の成熟期で、客観を否定し、反抗的態度はなお抜け切れないが、強い自我肯定のうかがわれる時期（15才―17才）。後期は大体大学生時代、客観を肯定し、主観と客観とを調和して、成人社会に移行する時期（18才―23才）である。

青年期というのは、子どもから大人になるまでの過渡的な一時期である。生殖能力の発現とともに児童期を脱するのであるが、なお未成熟者として成人の仲間入りが許されない時期である。したがって、この時期は子どもにも大人にも属しないと同時に、子どもにも大人にも属しているという二重の性格をもっている。

青年期が大人への過渡期であるとすれば、大人になるということは、どんなことであろうか。

成人の条件としてあげられることは、(1)身体の成熟、(2)一定水準の知的発達、(3)感情・情緒の発達、(4)自主的行動ができ自律道徳の発達、(5)個人と社会の関係の理解、(6)職業能力の発達などの条件が満たされたとき大人といえるのであるが、その発達や程度は個人差があり、個人の中にも、それらの発達のアンバランスがあるので、青年期の取扱いは困難である。

② 身体的成長―性的成熟

青年期に入ると、身長・体重・胸囲は急速に発達する。

顔つきも変化し、大人らしい形になってくる。そして、男女による性的な特徴も明瞭に現われる。皮下脂肪の層は男子は減じ、女子は増すので少女の顔は柔らかく輪廓が丸くなり、男子はいっそう角張り筋肉は引きしまって見える。身体の変化で特に目立つのは、性的変化である。第二次性徴があらわれる。その主なものは、女子では、発毛・乳房の隆起・骨盤の拡大・臀部の肥大・月経の開始などであり、男子では声変わり・発毛・肩やほほ骨の張り・筋肉の硬化・射精現象などである。このような二次性徴の発生は、青年の身体的・運動的生活に、また、精神的・情緒的・社会的な生活に強い影響を与える。

性的成熟に伴う青年の精神的变化は次の如きものがある。

- a 情緒の不安定性
 - b 反抗・粗暴な振舞
 - c 懐疑心が強まる
 - d 孤独へのあこがれ
- などである。思春期のはじまりは、戦前の学説では大体女子は女学校一年頃、男子は中学二年の中頃は最も多いとされていたが、現代の少年、少女の思春期に入る時期は前代よりも一、二年早くなっているといわれている。

これは戦後の青少年の身体的発達の加速現象によるもので、身体の急速な成熟に対し、知的・道徳的発達がおく

れ、心身発達のアンバランスによって性的非行、犯罪を犯す者が非常に多くなった点を注意しなければならない。

③ 性教育の問題

性教育の目標は、性的な適応ができ、性の社会的秩序にしたがえるように教育することにある。すなわち、将来の健全な性生活が営めるように、性に対する医学的な知識を体得させ、男女の正しい交際の仕方を教え、異性を見る目を育て、性道德を守り、性の問題に対する妥当な処理能力を伸ばすことである。

④ 青年期の基本的要求と取扱い方

青年期の基本的要求には、次の四点がみとめられる。a、独立への要求。b、将来の生活設計の樹立。c、よい配偶者の選択。d、人生観の確立等である。

a、独立への要求とは、親や教師の命令のままに、何等の矛盾も感じなく生活していた児童期を経過し、青年期に達すると、独自の判断、自らの意志によって行動しようとし、他人の命令・支配を拒否し、一人の人格者として独立したという要求が生ずる。

すなわち、心理的離乳が行われ、人生の第二の誕生を迎えるようになる。

親から独立したい、親からの命令・禁止・指示を受けることを嫌い、反面、青年自身自己の内面を反省すると、ま

だまだ自分は不十分であり、一人前の成人としての資格はない、もっと教えられたい、注意されたい、時には叱ってもらいたいという考えを持つのである。これ即ち、青年期の矛盾の心理である。

ここに親・教師が青年を取扱う際の注意すべきことがある。すなわち、どこまでは自由にさせ、どこからはまだ注意しなければならぬかのはっきりしたケジメをつけて接触することである。

b、将来の生活設計の樹立

青年期になると、自分は将来、大人になったらどんな職業について、何をして暮していくかということを考え始めるのである。

中学二年生頃になると、最初に中学を卒業したら、どこかに就職しようか、上級学校に進学しようかと考える。

戦前・戦後の区別なく青年は、親の家業をつぐことに決定している者以外は殆んど全部、進学・就職の問題に悩むのである。この問題は現代では一層深刻な悩みとなっている。これは、将来の生活設計の樹立の要求によるものである。

この要求がみたされるまでは、青年時代随分長期間、重荷を背負って悩み続けるのである。この悩みは男性の方は、女性よりも深刻である。

自分の将来の進むべき目的・目標が決定した青年はそれに向って、着々と健実に進んで行くが、その目的・目標が未定の者は毎日の生活は動揺しつづけ、そこに、非行や犯罪の道に陥って行く者が非常に多いのである。

この要求解決に際して、指導・示唆・助言を与える役目は父親の役目である。その時に親が考慮しなければならぬ要件は、子どもの能力・適性・趣味・興味・環境状況・将来の見透しなどである。この要件を全体的に考え、子どもと十分話し合ってから方針を決定すべきである。

c、よい配偶者の選択

青年期になると男女共、将来の好伴侶を求めるのである。よい相手が選定されて、結婚が成立して一家を持つてはじめて成人になり得るのである。

結婚の問題で古今東西、人生の幸・不幸・悲喜の生活がおりなされるのである。

d、人生観の確立

青年中・後期になると人生について考え始める。人生の意義は、人生の目的は何かという問題に遭遇して、いろいろと考え、悩むのである。その問題を解決するために、哲学書・宗教書・人生論などの書物を読み耽るのである。しかし、いかに書物を読んでも、人生の意義・目的は明確に把握はできないものである。探しても、求めても人生の意

義・目的は明かに解決できずに、最後に、人生は不可解だという結論に達して、自殺する青年は古今東西に極めて多いのである。

青年はある行動を起すときに、その目的・意義を明確にしてからと考える。しかも、人生についても、人生の意義・目的を明確にしてから、人生を歩み出そうと考えると自殺しなくなるのである。人生とは、文字や文章に表現できざるほど簡単に単純なものではなく、もし人生の意義・目的を文字に表現したとしたら、そこには血も通わず、生命もないもので真の人生ではない。

そこで、ゲーテの曰く、人生の意義は、「人生とは生きることだ。」しかも人生の目的は「よりよく生きることだ。」との定義は最も簡単に要を得た妥当な定義であると思う。

⑤ 心理的特質と取扱ひ方 a、情緒の不安定。

中・高校生時代は、きわめて情緒の不安定な時期である。それは社会的地位は不安定であることと、性的成熟による心理的動揺がその原因と考えられる。すなわち、児童期までに与えられていた子どもとしての特権と愛護が奪われ、大人のもっている特権と自由も与えられず、子どもの世界からも、大人の世界からも除外される。

ある時は「もう子どもでない。」と、いわれるかと思うと、

「まだ一人前の大人でない。」として取り扱われる。自分自身も「自分は子どもではない」と考え、子どもと区別されることを求める。しかし、内心では「まだ自分は一人前の大人ではない。」という不完全感をもちつづける。このように社会的にも心理的にも不安定となり心は動揺する。したがって、彼らは活気に満ちたり、内気になったり、むら気を起したり、静かになったり、反抗したり、従順になったり、攻撃的になったり、退嬰的になったり、それらの両極端を振りのように動揺するのである。

この頃は自分を子どもっぽさから引きはなして、少しでも大人に近づこうと努め、大人への模倣傾向を現わす。例えば、男児はなれない手つきで煙草をふかし、飲みたくない酒にも手を出してみる。このような行為は、大人への模倣であるとともに、自分は大人になったことを他に示すジェスチャーとも考えられる。

青年期に注意しなければならぬ心理状態に、否定的情緒といわれる、怒り・恐怖・憎悪・ねたみ・悲しみなどがあり、これらの情緒が急激に強烈に高まると、正邪善悪・合理・準合理の知的判断ができず原始的・衝動的な行動をするのである。かかる行動を運動暴発・短絡行動といい、非行犯罪行為となるのである。したがって、家庭や職場においては、このような青年の心理的動揺性を両親や上役は

よく理解してやる必要がある。

青年は自分はどう子どもでないと考えているのに、両親や上役は子ども扱いにし、感情をふみにじり、欲望や行為を理解せず、命令や干渉や束縛でかためると、反抗や粗暴な振舞いをあらわすのである。

それ故、家庭や職場においては、できるだけ、青年に責任をもたせ、一人前の大人として信用して取り扱い、相談的に話し合いつつ、理解の上で事を処理するように心掛けることが大切である。

b、自分をみつめる（自己反省）

兒童期は注意は常に外部に向っていたが、青年期になると静かに自分をみつめるようになる。ここに自己の分化が起る。

すなわち、見る自分と見られる自分とに分化する。見る自分のことを理想我といい、見られる自分を現実我という。こんな自分になりたい、こんな自分でありたいと思う自分（理想我）が高い所にあつて、低い所にあるみにくい自分（現実我）を眺めている。

この現実我は時には不正もし、嘘も、盗みも、怠情も、非行も、あやまちもする低い自分である。それを高い所から眺めていて、みにくい行為を非難し、さいなます役目をしているのは理想我である。この理想我は少しでも現実我

を高めて理想我に近づけようと努力する。このような精神作用を自己反省という。青年はこの精神作用によって、一日と進歩向上して行くのである。この心の作用は青年の本領である。古来、「己れにきびしくあれ。」との諺はこの心理作用である。

青年期の悩みの一つに、この理想我と現実我の深い溝に對して悩むのである。

c、殻の中に閉じこもる。(自己閉鎖性)

児童期までは開放性が顕著であるが、青年期には閉鎖的になり、かたい殻の中に閉じこもる。これを青年期の自己閉鎖性という。

青年期には自分を他人から理解してもらいたいと求めていながら、他面では、自分の内面生活を大切に秘めて、だれにもものぞかれまいと努める。ここにも矛盾の心理がうかがえる。

青年は人前には自分の心を包みかくす。自己の内面の不安や動揺は、自分自身ではどうすることもできない、ただ、心のある面は、親しい友人や母親に多少は打開けるが、どうしても打開けない秘密の面をもっている。この秘密の面に無理にふれようとすると憤怒し、時には反抗・粗暴な言動を起す。

教育的に見れば、この自己閉鎖性をできるだけ軽度にし

めたいものである。そのためには、幼児期・児童期の頃からたえず家庭内で、開放的なしつけをし、家族皆でなごやかな話し合いをし、なんでも親に相談のできる家庭的雰囲気を作ることである。そして、青年期になったら、両親は青年の心理を理解し、同情し、共鳴共感してやる心得が必要である。

人間の煩悶・苦悩も他人に打開けてしまえば、ある程度心がいやされるのである。

青年の精神的成長には、煩悶や苦悩は必要条件であるが、強度の煩悶・苦悩は時には身を破滅に陥し入れる危険性がある。

青少年の不良化防止には、何事も親に相談し、親しく親子で話しあえる家庭雰囲気を作ることが、最良の対策である。

d、自己劣等感。

青年は自己をみつめ、自己を反省する。そして、自分の本質を見きわめようとする。すなわち、「自分は他人と比較してみても、どうなのか。」「どうしたらもっと美しく、強く、優秀になれるか。」「将来、自分はどうかであろうか。」「生きていく価値があるのか。」「などと真剣に考える。

このように考えれば考えるほど、自分はずまらないものに見えてきて、自分に自信がもてなくなる。そして「淋しさ」

「なさげなさ。」が生じ、「自分は駄目だ。」という感、すなわち、自己劣等感・自己嫌悪感に陥るのである。

これをまぎらすため、不安を解消するために虚勢を張ったり、粗暴や反抗的態度を示したりする。極度の自己劣等感は自暴自棄にならせ、非行や犯罪や自殺の原因になるのである。それ故、両親は自分の子どもに、このような傾向がみえた場合、できるだけ早く、その原因を取り除くよう手当を施すべきである。

そのための方法は、「青年はだれもが、自分自身について、何等かの劣等感を持っているものだ。」ということを教えること、劣等感は優越感と反対の心理であることを教え、他人よりも優れたいという欲望を弱めること、他人とあまり比較しないこと、他人は他人の道を往け、自分は自分の道を行く心構えを作らせること。更に世の中は自分の思い通りにならないことを教えること、劣等感是客户の規準のないもので、たあいのないものであること、などを教え、本人のもつ長所・特技を賞讃し、雄々しく生きるために勇気づけ、激励し、援助してやる必要がある。

e、自己主張

青年期には自我意識がめざまめ、身体的発達に伴う体力の自信と、自我水準の昂揚から、自己を判断の権威者と考える。そして自分の行為や考えを肯定し、自分の尺度ですべ

ての事柄を律しようとする。そのため、青年は一旦言いだせばなかなか主張をまげない。

時には、自分の意見が間違っていることが判明しても、なお主張し続ける。

この自己主張は、自由を求め、自我を開放しようとする態度となつてあらわれる。

そのため、青年は自分に關係する一切の権力・權威・圧迫・束縛を嫌い、それらを払いのけ、自分の思いのままの行動をしようとする。そして、口うるさい家庭や窮屈な職場から飛び出して、流浪の旅に出て、時折、不良化のコースをたどる者がある。

この青年の自由を求め、自我を開放しようとする心理傾向は、今日の自由主義・民主主義の風潮と相俟つて、誤つた自由主義を実行にうつす青年が非常に多く見られるようになった。彼等は自己の本能や衝動のままに行動して、それが真の自由であると主張するのである。

青年期の指導には、他人の意見を謙虚な気持で、一応は受け容れる素直な態度の育成が大切である。すべてを受け容れるのみではなく、受け容れた後、それを心の中で種々批判し、検討し、正邪善悪・合理・準合理をわきまえて、取捨選択する知性と生活態度を育成し、自分の行動に対して、つねに道義的責任をもつように指導する必要がある。

そのためには、両親は青少年の非行や誤った考えに對して、冷静に説き聞かせ、時には毅然とした態度をとり、決して控え目や遠慮をしてはならないのである。

f、名譽心。

青年は自らの水準を常に高く保ち、これを傷つけられたくないと願っている。青年は名譽心が強いのである。そのため、恥を知り、怒り易いのである。

彼等の生活のあらゆる面において他から尊敬され、他から関心を受けようとする。特に異性からの関心を引こうと努めるのである。とりわけ、青年は自己の能力・容貌・家庭などのことに關しては、他からひげめを感じることは大きな苦痛であり、少しでも高く評價されたいと考えている。これらの点について他から侮辱されたり、非難されると憤怒するのである。

それ故、青年の集会や青年を取扱う両親・教師・上役は青年を人の面前で叱責したり、軽蔑したり、嘲笑したりすることは、つつしまなければならぬ。

注意や叱責は一對一の場で行い、是認と賞賛は人前で行うことは、青年の名譽心を重んじた取扱ひである。

この名譽心と自我水準の昂揚は、それが醇化されると、學問に、芸術に、運動競技に優秀な成績を示そうとして、百練千磨・努力精進の原動力となるのである。

g、奉仕の精神。

更に青年期には獻身・奉仕・サービス精神が顕著になる。青年は己の属する団体のため、公のためには我を忘れてはたらく念が強く、自己の愛する人のため、自己の信ずる理想実現のためには如何なる労苦をも厭わぬ強さを示す。この傾向は時には無暴な英雄的態度となつて、全身全霊を捧げ、死をも敢えて辞さない行動ともなるのである。

古来、世界の何れの戦争も、ほとんどはこの青年の尊い奉仕の精神により、青年の犠牲によつて遂行されたものである。

h、あこがれと悩み。

青年期は最も感激にあふれ、あこがれに満ちた時代であると共に悩み多い時代でもある。

このあこがれと悩みとが烈しくもつれ合う感情生活が青年期の生活でもある。

このあこがれには価値に對するあこがれと異性に對するあこがれがある。

即ち、美なるもの、真なるもの、善なるもの、清きもの、強きものへのあこがれである。

青年は美にあこがれて、美術や音楽や文芸に情熱を捧げ、真理を求めて、哲学や科学に精根を傾ける。道を求めて修養し信仰に入る。

また、青年は海や山を愛し、運動競技に熱中して自己を伸長し、価値を実現しようと努力するのである。

このような価値に対するあこがれの反面に、異性に対する強いあこがれをもつ、青年はこの世の中に生きていられる中で最高に美しいものを先づ異性に見出すのである。

青年は異性に興味を感じ、愛情を覚えるのである。異性愛がこれである。異性愛は性欲ではない。価値に対するあこがれと異性に対するあこがれとは両立しない。時にはこの両者の間に矛盾と衝突が起り悩みの原因にもなる。

このように青年はあこがれに満ちた生活をするのであるが、自己の無力性の故に、現実には痛ましくもちひしがれ、あこがれる理想と現実とがかけはなれていることのために悩みは深刻になるのである。

青年は種々なるものにあこがれ、そのため煩悶・懊悩する、かくして精神生活が深化していく。すなわち、苦悩を克服せんとして努力し、高く高い精神文化の世界に登って行く。しかし、この努力を欠き、自己の無力に絶望し、自己劣等感に陥って、自暴自棄になり遂には非行・犯罪を犯し、身の破滅を招来することとなる。

悩みから超脱する場合如何なる道を選ぶかということとは、人によって異り、煩悶の性質、程度によっても異なるのであるが、時にはその道を宗教に求めることがある。回心が

青年に多いのは、そのためである。殊に、社会の混乱期には、宗教に帰依する青年は多くなるのである。

i、青年と思想。

青年期になって自我がめざめ自主的態度が確立すると、雑多な知識や思想を整理統一して自分なりの組織体系を作ろうとする。そのため、教科科目に対する好き嫌いができる。

読物は一般に科学的なものを好むが、恋愛友愛を扱った文学的なもの、偉人の伝記、人生の根本問題にふれた文芸作品、哲学・宗教に関するものを喜び、また生命の否定を説くような作品にも心を引かれる。

青年の思想はそれぞれ境遇や教養の程度によって異なり、趣味・興味の方向によって千差万別である。

しかし、一般に青年は時代と社会の空気を敏感に吸収し、その思想はその時々時代の特色を帯びてくる。

その特色は、抽象的・理論的・批判的・懐疑的・理想主義的である。更に急進的・革新的・徹底的である。

これらの青年の思想傾向は、実際問題として実現困難なことも、合理的であればよいとする考え方が起り、自己の理想乃至思想を絶対視しようとする自我意識の発動と抽象的・論理的思考力によって、他の思想を批判し、世間一般の習俗・道徳・風潮・現実を痛烈に批判し、往々にして独

善的であつて中正でない態度を示すのである。

伝統的な思想や現実の社会に対する疑惑・不満が昂ずると、これを否定する態度をとり、急進的・革新的思想が生まれる。しかも、その時は中途半端では妥協できず、徹底的行動に出るのである。

したがつて、青年の考え方は鋭利ではあるが、必ずしも周到ではなく、徹底的ではあるが、一面的たる危険をまぬがれない。

第八課題 成人期（男子）の心理

社会教育上、青年期と成人期との区別は必ずしも明確ではないが、一般に、社会的に独立し、責任をもてると公認される時期から以後、老人期に至るまでを成人期と考えられている。

学校教育を終了し、家庭を持っている者を成人と見るのが普通である。大体、男子ならば二十五才頃から六十才頃までと考えられ、六十才以後を高令者として区別している。更に、社会教育上、婦人は成人の中でも、特別な問題を数多くもっているので、別に取り扱っている。

ここでの対象は、二十五才から六十才頃までの男子成人の心理特質と限定する。

成人男子は精神的にも、肉体的にも働きざかりといわれ、身体の面は体力の充実と氣力の旺盛とで、人間として完成

し、行動は安定してくる。社会的には実力が認められる。そのため、すべての面に自信を持つ時期である。

成人の前期は二十五才から四十才頃までで、この間は成熟した状態が続くのであるが、四十五才を過ぎると、いつしか白髪もまじり、頭髮もうすくなり始め、四十肩・五十肩や腰痛・リュウマチ・神経痛などがあらわれ始め、疲労し易く、疲労すればなかなかとれなくなる。

したがつて、前期のように無理や頑張りがきかなくなってくる。

更に成人病といわれる病氣もぼつぼつ氣になり始める。

この頃以後は男性には胃ガン、女性には乳ガンの発生、高血圧などが起り、一般に頭の調子がくずれ、心臓障害・腎臓障害も起り易くなり、糖尿病なども多くなり、一般的に、活動力は低下してくる。

また、視力が衰え、齒も悪くなる。皮膚が油氣がなくなり、小じわもふえ、色素が沈着して、しみが出はじまる。

この頃には身体的発達はずまり、停滞期に入ると共に老衰現象が現われ始める。

また、成人前期に不摂生をした者は、この頃から慢性の心身障害を起すことになる。

更にこの頃から運動不足・過労・過食・栄養摂取の不釣合から徐々に老人病の原因を作り始める。

それに加えて、心理的緊張、過勞から精神障害を起すことになる。

最近、四十才頃の男性は過勞・不規則・不摂生な生活・人間関係の困難さ・不安などのために、全身倦怠感・疲労感・肩こり・胃腸障害を起すものが、非常に多いといわれている。食欲不振・胃痛・吐気・便秘・下痢などがそうである。

以上は、肉体的、医学的な面における一般的徴候であるが、心理的な面においては、次の如き特質が考えられる。

四十才を過ぎれば、青年期の悩み、不安、緊張感は減じ、動揺もおさまり、感情も安定し、考え方は現実的・実際的になる。

これまで内向的であったものも、やや外向的になる。

考え方も架空的・観念的であったものは、現実的・實際的になり、現実生活への適応性は高まってくる。更に、家庭や職業への関心、責任感が強くなるために、社交的となり、世俗的になる、具体的な人間関係を配慮し、職業への熱中・執着が強くなる。

その反面、職場と家庭の板ばさみから、過勞になることもあり、悩み、惑うことも多くなる。

昔、孔子は「四十にして惑わず。」といった不惑の年令に達した者は、現代社会では、不惑の心境とはほど遠い状態

である。

現代の一般的風潮としては、四十代は心理的に強いフラストレーション（欲求不満）に悩まなければならぬ時期である。

それは、家庭内でも、社会的地位においても、経済的余裕においても、まだまだ中途半端な時期であつて完全な安定が確保できないからである。

しかるに、生理的には、そろそろ自己の限界が感知されると共に、社会的にも、自己の目的・目標の先は見えてきて、今までの高い理想・目標を下げなければならなくなり、そこに人生の諦め、焦りが起り、そして衰れささえ感ずるようになる。

しかも、日常生活には益々責任は重くなり、不断の精神的緊張を強いられるようになり、若い発潮とした生命力は次第に衰えを感じるのに、休息や心の平安が十分与えられない。慰安の場・治療の場であるべき家庭でさえ、子ども達の入試や就職や結婚などで、安息する処ではなくなる。

それらの問題にまきこまれると、自分の心は乱される。それらの問題の域外に立つて過すことは許されない。

他方、自分自身の生命については、病氣や災難に遭遇する機会は益々多くなり、死が身近かに迫っていることが考えられ、不安でたまらなくなる。もし、自分が倒れば、

家族全体は路頭に迷う現状では、病氣・災難・死についての不安は極めて深刻である。

以上の如き特質は現代の一般成人男子は、その程度の差は多少あるにしても、共通して所有し、悩んでいる傾向である。

これらの問題を少しでも解決し、悩みを克服するためには、成人男子は、自らをきたえ、学習しなければならぬ。

それのみならず、今日の激しい変動社会に適應して行くためには、すでに受けた学校教育のみでは不充分で、日に進歩する文化・知識・技術を身につける努力をしなければ、社会から置き去りにされるのである。

殊に高度な知識・技能を必要とする職業に従事している者は社会の進歩に遅れをとらないように自己研修が必要である。

それに加えて、世界の情報を集め、余暇を有効に利用し、悩み・不安を解消するために、教養を高め、情操を陶冶して、「心の豊かさ」を育てて、自己の存在を充実させ、疎外感を克服して、生きがいを実現する道を求めなくてはならない。

第九課題 成人男子と社会教育

—なぜ成人男子は公民館行事に参加しないか—

今日、社会教育・公民館活動に種々の困難な問題が山積

している。例えば、経費の不足、施設、設備の不備、指導者の問題、行事のマンネリ化、一般社会人の無関心など、その中でも特に成人男子層が殆んど社会教育の場に出席してもらえないということは、全国的な傾向である。

そこで、なぜ成人男子は社会教育に対して、ソッポを向くのであろうか。その点について卑見を述べてみよう。

一般に、教育の効果をあげるためには、教育の対象、学習者の理解が必要条件である。そこで社会教育担当者に要請される第一のことは、社会教育の対象を理解することである。

社会教育の対象は、老人あり、壮年あり、青年及び少年ありで、年令的に各段階にわたる人々である。また、男女の性差あり、教養・職業・興味・関心の差のある人々である。

このように質的に各種各様異った人間が対象であることは明瞭である。

この異質の人間をどのように理解するか。その理解の根本理念に二つの立場があると思う。

—その第一の立場は、個人とその個人のもっている自主性、自律性に対して尊敬をもつてのぞむべき立場である。すなわち、個人の行動の自由、学習課題の自由選択、個人の生活尊重し、人間の権利を承認する立場である。

第二の立場は、個人は自ら責任がとれず、自己決定ができず、他人からの指示にしたがい、他人によりかかり、外部からの規制によって生活し、自らの生活を営むために、自己決定をする自主性が弱く自由を実現できないものと見ると見る立場である。

この後者の立場に立つ者のアプローチは、人間の行動を支配し、統制しようとするのである。この支配や統制の方法は直接的か、間接的かに加えられる。この支配や統制が時には、支配され、統制される個人の利益と考えられる場合がある。何れにしろ、この立場には個人の尊重が比較的小いのである。

社会教育の面からすれば、この第一の立場に立たなければならぬことは当然である。

社会教育の中で成人教育の主体は成人自身であり、成人は社会からも、法律上からも、誰れからも教育を受けたり、学習をすることについて、強制や圧力を受けることがないのである。すなわち、成人は自分の自由意志によって、学習の課題や場を選択したり、拒否したりすることができるのである。

このように考えてくれば、社会教育の場に成人男子の参加が得られない根本理由は、社会教育の本質そのものにあるといわなければならない。

成人男子は一家をもてば、家庭の生産面、経済面の主体であり、責任者である。

したがって、成人男子の注意・関心はこの方面に注がれ、教育や学習のことは、生活の周辺層に追いやられるのである。

そこで考えなければならない事は、もし、成人男子が教育を受け、学習をしようとするならば、どんな動機によるものであろうかということである。

その第一は経済的な要求をみたしてくれるものであること。第二は社会人としての要求をみたしてくれるものであること。第三は自己の趣味・興味に即したものであること、などである。

成人は自分の学びたいものを自分で選択する。この選択は自分の要求が満たされるものでなければならぬ。

それ故、これら成人の要求に合致しない行事を社会教育担当者が計画しても、成人男子は参加しないのである。

更に、成人男子が社会教育に参加しない原因は、成人自身の心理的な面にあることも考えねばならない。

それは成人男子は自分は教育や学習は終了し、完成したという自信もっていることである。先般もある会合で、ある人から、

「成人教育だとか、父親学級だとかいう名称は、成人が

軽蔑された感じがして面白くない。われわれは他人から教えらるる教育は何年か前に終了している。学級生として学習しなければならぬことは、自分にはない、われわれに教えようとする指導者は少々思いあがっているのではないか、また、この年になって教えられる立場に立って、つくねんと坐っていられると思いませんか。」という発言があった。この発言は一応もつとも考えられる。

このような考えをもっている成人男子は相当数あると思ふ。

このような成人男子は社会教育の場へは足を踏み入れないのである。

しかし、成人は自分は完成した人間だと自信を持っている人は多くはないであろうと思う。一般に成人は「自分がなりたいと思う自分。」と「現実の自分。」との間に大きなギャップのあることを感じているであろう。

それでは成人男子の希望していることは何んであるうか。それは「自分の才智・技能を高めたい。」「権力を持ちたい。」「自己を表現したい。」「自由を欲しい。」「生活を享楽したい。」「他人と親しく交りたい。」等を望んでいる。

要するに、自己を向上させ、進歩させたいと望んでいる。こんな要求はもってはいいるが、学習の場に出席することになると抵抗を感じる。

この抵抗は、教育の場、学習の場に尻り込みをさせるのである。

例えば、学習の仕方を忘れている。自分に学習する能力がすでになくなっていると考える。自分に学習は無関係であると思う。

また、自分は他のすぐれた人達の仲間に入って競争して、他人に笑われはしないかと思ったりするのである。

そればかりではなく、成人になると身体的、精神的に精力が衰えている。そして心身の敏捷を欠き、新しい事態に対する適応性を欠き、冒険よりも安全性を求め、もの事に慎重であり、態度に融通性がなくなってくるのである。一般的に年令的な変化が、生活の速度と調子をも変化させるのである。

それならば、今日、社会に生きていくために成人男子は学習をする必要はないであろうか。否である。大いに必要があると思う。

現代社会は日毎に複雑化し、急速に進歩し、発展し、変化しつづつある。それにつれてこの社会に生活して行く社会人の責任は益々増加しつづつある。

この社会の構成員としてめざめ、理智的な社会人となることが必要である。

そのためには学習の障害を自ら克服して、学習の場に積

極的に参加することが大切である。

勿論、社会教育の場に出席しないで、それぞれ個人の自由と自己選択によって、自己教育をしている人は多数あることと思う。

このような人々に、無理に社会教育の場に出席することを要請すべきではない。

そこで、それ以外の人々に対して、社会教育担当者は、成人教育のプログラムの作製、企画、運営に際して、次の諸点を考慮する必要があると思う。

成人教育において、学習の主体は成人自身にあるという認識に立って、成人の要求、希望、問題を調査し、成人の最も切実で緊急な問題を学習の課題として取りあげ、前述の如き成人の心理的傾向、学習上の障害を十分考慮して、学習の場を構成し、快適な学習活動がなされ得るように準備し、援助することが必要でなからうかと思う。

かくして成人男子の社会教育への参加の意欲を高めていくことが、現段階における社会教育の重大問題である。

第十課題 高令者の心理と教育

① 高令者の一般的特徴

老年期になると身体・精神の両面共に衰える時期である。身体面には形態の萎縮・後退・低下であり、なかならずく弾

力性・修復性は目立って低下し、疲労し易く、損傷しやすく、しかも、一度損傷すれば回復に時間がかかる。精神の面でも、脳の神経細胞が萎縮し、機能が低下する。特に知能の衰えが顕著になる。しかし、機能の衰えの程度・速度には著しい個人差がある。

一般的に精神活動のスピードが落ち、記憶が悪くなる。一旦憶えてもすぐ忘れる。そのため新しいことの学習は困難になってくる。更に計算力、殊に暗算力が弱くなる。

老年期になると、一様にすべての能力が衰えるものではない、記憶力・感覚・運動反応などは衰え易いが、言語的知識・判断力などは衰えにくい能力と考えられる。

更に老人になると瑣末なことにとらわれず、ものごとの本質を把握する能力はかえって、上昇する能力と考えられる。殊に人生や世界に関する事件・事物について、そのように見られる。

これに反して、創造的思考力、飛躍的着想力は衰えて思考に硬さが生じ、思考様式、思考内容が、機械的・固定的になる傾向が強い。

② 老人期の性格の変化について

性格の面の変化には、個人によって差異がみられる。そこに三つの違った型がある。

その(1)は、若い時の性格が次第に尖り、顕著になってい

く型。(2)は逆に若い時の性格は次第に円満になり、調和的に変化する型である。第(3)には、一般的にだれもが示すのは老人癖である。この老人癖は自己中心性、保守的、出しやばり、愚痴っぽく、疑い深くなる。このような変化は、凡ての老人に必ず起るものではなく、老人の生活環境によって、孤独、無為、劣等感、不安、不満などによって生ずる産物とみられる。

老人の精神的变化は、無為徒食をして、活動を中止すると顕著になり、精神的活動が加わると円熟上昇していくものと考えられている。

③ 老人期の教育

高令者は今日の急激な社会変動に適應して行くためには、周囲の人々の考慮は大切であるが、老人自身の自己教育がより大切である。

- a 老化的現象を如何にして防止するか。
- b 経済的困難に対処する工夫。
- c 核家族化の現代の家庭環境に対処する考慮、特に若者達と円満な人間関係を維持するための知識・技能の修得
- d 余暇時間の過し方。
- e 孤独から解放され、老人同志の仲間入りをする努力と工夫。

f 健康管理の知識と方法の学習。

g 老人になつての趣味や教養、時事問題に興味と関心をもつ努力。

等は老人自身の学習課題である。

その外に、家庭内の家族、一般社会、地域の教育行政、国家の行政面から老人教育に関して考慮すべき点も多くあるが、この問題を省略する。

第十一課題 社会教育と生涯教育

① 生涯教育の意義

最近、社会教育の場で生涯教育という言葉が頻繁につかわれるようになった。

この言葉は今から十年程以前に、ユネスコの会議で (Life Long integrated Education) という言葉が使用されて、それを日本語に生涯教育と訳されてから、使われ始めたものといわれている。

生涯教育とは、人間の教育は、誕生から死ぬまで一貫した教育でなければならない、ということと、その間に家庭教育・学校教育・社会教育(職場教育を含む)を受けるのであるが、それらの教育が有機的に統合されて、それぞれの立場・本質をふまえて、全体として総合されて人格の完成を目指す教育を意味している。と、考えられる。

某研究員曰く、生涯教育を、人間は生涯かけて教育を受

けていかなければならないものであると考えると、早死した者に生涯教育はなく、永生きした者のみ生涯教育はあるのかという疑問が残る。と、生涯教育はそういうことでなくて、やはり、幼い頃から、生涯教育的な安らぎとか、生涯教育的な確かさのある中に子供達は育っていくというこゝとにつけて、幼小時から教育がすでに生涯教育でなければならず、学校教育を終つて、年若くして嫁に行つた花嫁さんも折りにふれて、生涯教育の機会を得て自分をよい妻、よい母になるよう努力する生活を終えて生涯を完うする。

そのような生活を支える原動力をなす教育を生涯教育と思ふし、生涯という概念は分母的な自覚であり、その意識の上に分子として、いろいろな生活が繰り広げられ、教育もそういう分子的なつながりの一環と考える。と、といつてゐる。

また、生涯教育を自分の一代のみに限定せず、遠い祖先親をふまえ、将来の子供や孫の未来を見透した考想に基づいた教育を生涯教育と考える必要があるという、宗教的考察の意見もある。

この論には賛成したいと思ふ。

② 生涯教育の必要性

現代人の中に学校教育を終えて、学校を卒業するともう自分は学習も、教育も終つて、これで自分は一人前になつ

たのだという考えをもつ人が多いようである。

日本には昔、聖徳太子の言葉に「身を終るまで修業せよ」という教訓がある。これは生涯教育の必要性を説いたものである。

人間の教育には二つの型がある。その一つは他律的教育、他からしつけられ、教えられる教育であり、その二は自己教育、自律的教育で、自分自らが自分を教育する。前者は主として家庭教育と学校教育であり、後者は学校を終つた成人自身の教育形態である。

何れの形の教育も、その教育の効果を高めるためには、被教育者は、自分は不完全な人間だ、いたらない人間だ、という謙虚な自己反省の気持が必要である。そして他人の言葉を一応は聴き入れ、しかる後、心の中でこれを十分批判・検討を加えて、自分のためになると思われるものを吸収して自己完成に役立てようとする心構えが必要である。

更に、現在、自分の目前にいない昔の人や異境の地に住んでいる立派な人々の意見・思想は書物を通じて聞き入れて、自己完成に資する。結局、生涯教育とは、親鸞聖人の愚禿親鸞と称され、愚中の極く愚なる者と伝教大師は申されたことは、この謙虚な自己反省を基礎にして道を求められたのではなからうか。かくして自己完成のための教育である。

また、ウイリアム・ジェームス (William James) は「修養に努めない人、憂うつな人、かたくなな人」こんな人をオールド・フォギズム (Old Fogysim) — 頑迷固陋な人という。大多数の人は、すでに二十才位からこの傾向が始まると述べている。

老人になればだれもが、かたくなになり、他人の言葉を素直に聞き入れなくなる傾向が出てくる。しかるに、青年時代で他人の意見や言葉を聞き入れない者は進歩・向上は望めない。他方、六十才の老人でも、他人の意見を聞き入れ、せつせと書物を読み、自己の修養に努力している者は日一日と立派に進歩・向上して行く人であるというのである。

人格の完成ということは古来、各国の教育の目標にかかげられている。日本でも「教育基本法」の第一条の冒頭の句は「人格の完成をめざし」から始まっている。人格の完成は人間が生涯努力すべき抽象的な教育の理念であって、何才になっても人格の完成はできないと思う。これは努力目標である。

そういう気持で自己教育をして行くことが、生涯教育のねらいである。

生涯教育の第二の内容である「インテグレートッド」統合の面からみれば、現今の家庭での両親が子どもに要求し、教育することは、素直で、正直で、親のいうことをよく聞

き、他人に迷惑をかけない子どもはよい子であり、そうあって欲しいとつけている。

学校では、教師はお父さんやお母さんも時々間違ったことをいうから、そんな場合はどんな反抗し、批判し、親をへこましてやる子どもは立派な子だと教えられたとしたら、子どもは両親の言に従ったらいいか、先生の言を信じたらよいかということに戸惑いを感じるであろう。また、友達という言葉や行動は別な方向を示すと一層混乱が起きる。

一般社会の状態も別の刺戟を与える。

このような社会において、教育の効果はあがらず、青少年の非行や犯罪の原因にもなり易いのである。

そこで、家庭教育・学校教育・社会教育が有機的に統合をはからなければ、教育の効果をあげられない。これらの各領域の教育を統合させていく媒体、世話役、パイプ役になるものは広い社会教育であると思う。

これらの意味から、生涯教育の必要性の第一点が指摘される。

更に、激動する現代社会に適應して生きて行くためには、何人も勉強しなければ、快適な生活が続けられない。

経済・文化・社会・教育・情報・国際関係等々の諸方面の急速な変化を理解するためには、学校教育のみでは不充

分であつて、学校を卒業した後も続けて老人になつても学習を必要とするのである。

③ 生涯教育の課題・内容

- (1) 乳幼児期の養護としつけ——(家庭教育)
- (2) 小・中・高・大学時代の学校教育
- (3) 成人期・老人期の教育(自己教育)

前述の如く現代社会は機械化、工業化、情報化の時代であり、急激に変化する時代である。この社会に適應するためには学習が必要になる。

人口の都市集中化により人間の連帯意識が薄くなり、核家族化により家庭生活に変化をきたし、機械化により人間性喪失が増し、自然の破壊による公害・交通災害に対処する方法、自由時間の増加に対して余暇時間の利用法、技術革新に対処するための職業上の知識、技能の修得、市民意識の向上、社会連帯観の樹立、国際的知識の修得、家庭教育の振興、老人問題、婦人の余暇利用法、消費生活等々に関する学習、更に体育、レクリエーション、趣味の知識、技能の修得等も併せて生涯教育の学習内容と指摘したい。

四 今後の社会教育のめざす人間

わが国の教育のめざす理想的人間は、「完全な人」であるが、これはあまりに抽象的である。

今後の社会教育のめざす人間は、家庭教育、学校教育、

職場教育を基礎にして、思考力、実行力、批判力のある人間尊重の精神をもつた人間関係の円満な人で、国家・社会の発展に貢献する意欲のある人、国際的知識・感覚をもつた人、以上の諸条件を具えた人である。

このような人間育成をめざして、社会教育は進まねばならないと思う。

第十二課題 随想・生活と「ことば」

過日、石川県農協婦人部の若妻研修会から、助言者として出席を依頼されて、出席しました。この会合で聞いた話の中でハッと思ったことがありますので、それについて述べてみようと思います。

その話をされた方は、若妻ではなくて、某農協婦人部の部長さんで、六十才を過ぎたと思われる指導者でありました。

「最近では農村に嫁がこなくて、農村は大変困っています。先日、私は農村のある裕福な家庭から、息子の嫁を一人探して欲しいと頼まれました。その嫁の条件は三つあって、第一は裕福な家庭のお嬢さんであること。第二は美人であること。第三は頭がよくて大学を出た方であること。でありました。

随分欲深いなあと思いましたが、八方探しましたところ、その希望条件にやや叶っていると思われる娘さんが見つ

り、推薦して、お見合いをいたさせましたところ、双方共オーケーで、とんとん拍子に話がまとまり、私が媒酌人となって、盛大な結婚式があげられ、やれやれと安心しました。

両家とも満足し喜び合いました。特に新郎の家では、「農村に嫁が来てくれた。」と喜んで喜びました。

ところが、新婚旅行も終り、約一ヶ月程たった頃、新郎の家から呼び出しがあつて、行ってみると、次のような苦情が述べられました。

「うちの姉さんは、朝起きて、お早ようございますの挨拶のことばはなく、夜、就寝の時に、お休みなさいもいわず、食事の前後にも何の挨拶もせず、外出のときにも、どこどこへ行って参りますともいわず、帰宅しても、ただ今帰りましたともいわないのですが、これでは困ります。

あなたは媒酌人ですから、姉さんの実家の御両親に、このことを連絡して、実家の両親から、必要な挨拶はするものだよと、教えてもらいたい。」と、のことでした。

こういわれて私は困りました。

しかも、このお嫁さんは、某私立女子大学の英文科の卒業生でありますと、つけ加えられました。

この話を聞いて私は思いました。

この嫁さんの挨拶のしつけは、親の責任か、学校教育の

責任か、この人は英語は話せても、日本語の挨拶が話せないのか。

こんな嫁さんは、農村に来てはつとまらないのではなからうか。

否、都会生活でも農村生活でも、円満な人間関係は保持できないでしょう。

高等教育を受けた女性にこの種の女性は最近多いのではあるまいか、自分を高く考え、高い誇りと自己優越感をもつて、自分より劣る人間にこちらから頭を下げ挨拶などする必要はない。又尊敬もしない人に挨拶をする必要はないと考えている者が多くなったように思われます。

農村でも都会でも、家族生活の中にも、近隣社会の中にも、職場でも、朝夕の簡単な挨拶はどんなにか、生活にうるおいを与えることか知れないと思う。

私自身反省してみると、ことばについて、あれこれ言う資格のない者であることを十分に自覚しているのであります。

学生時代つまらないことに日常の挨拶をかわずと、何か純潔がけがされるような気になったり、俗物になりさがるような気になったり、わずらわしい気持になったりしたものです。他人から「今日はいいい天気ですね。」「また雨が降ってきましたね。」の挨拶があると、なんで自然現象を、そ

のように一つ一つ再確認しなければならぬのか、などと思つたものです。

それだけではなく、何んでもないことに激しい口調で、感情を高ぶらせて怒つてみたり、時々、喧嘩腰で口論したり、舌たらずで誤解をまねいたり、一言、多過ぎて嫌われたり、今日まで、幾千回となく言葉で失敗していることを知っています。

そのためか前述の婦人部長さんの言葉が身にしみて感じたのであります。

今一つ思い出すことは、今は亡き母の思い出であります。私の青少年頃、田舎育ちの母親からよくいわれたことは、「人間というものは、ことばでつきあうものだから、言葉に注意しなさいよ。」と、幾度も教えられたのであります。それをついに身につけずじまいにこの年令にまでなつてしまった不甲斐なきをしみじみ感じさせられます。

それにしても、無学な母は人間関係の最も重要な真髓を体得していたものと感心いたします。

家庭内でも、近隣社会でも、友人間でも、職場においても、いさげあひつた言葉は言い、言つてはならないことはいわぬように心掛けて、円満な平和なうろおいのある人間関係を作り、住みよい社会環境を作ることに努めたいものであります。

第十三課題 豊かなる愛情は人間の宝

—大学生の自殺(記録)—

近代社会は急激に変化している。この社会に即応して生活していくためには、絶えず自己教育が必要である。

物質文化、機械文明が進歩し、月の世界に人間が行けるようになった、われわれ家庭では電気器具が満ちている。

また、物や金は豊富になった。しかし、人間と人間との関係は昔から依然として進歩もしなければ、改まってもない。進歩どころかむしろ逆に、今日の社会は人間疎外、人間の孤立化、対立、抗争がはげしくなり、人間を不安や恐怖にかり立てている。また、現代は競争過剰の時代で、そのため人々は心身をすりへらしている。このような時代にこそ、あらゆる機会を利用して、協力・融和の方法や技術を身につけ、対立的・孤立的でない、あたたかい人間の愛情によって望ましい人間関係を円満な人生観を形成するための社会教育が必要であると思う。

私は昭和四十四年四月から四十六年三月まで七十年安保闘争で学園紛争の最も激烈な二ケ年間、大学のある学部の教務委員長として、学部長の補佐役をつとめ、すっかり身心をすりへらし、疲労の極に達し、最後の一ヶ月半はついに入院した。

無理難題を学生から申込まれ団体交渉としてつめよられ

た。時には「反動教授だ」「たか派の最右翼だ」「なぜ吾々の要求を飲まないのか」「文部官僚の手先だ」「吾々の自由を束縛する気か」等々と罵声をあびせかけられた。

しかし、学生の申し入れ事項で筋が通り、理屈に合ひ、将来の学部的发展、今後入学してくる学生に禍根を残さな
いと思われる要求は承認した。それに反することは理由を
説いて一歩も譲らなかつた。

任務も終え八月の休暇は学則では二ヶ月のところを二週
間しか与えられなかつた。それは休暇を補講のために使用
したからである。この二週間一切を忘れてのんびりと憩い
の場所、北海道へ旅行することに決心した。北海道は私の
心のふる郷である。そののみでなく北海道に私を引きつけ
る強い力が四つある。その一つは同級会であつた。

(→)

私の出た中等学校は札幌にある。学校を卒業して満四十
二年を経過した。青年期に共に語り、学び、あばれた同級
生のクラス会は八月二十二日に札幌に催されるから出席す
るようにとの招きを受けた。同年に入学した者は一六〇名
この級会に出席した者四十余名、死去した者が五十余名、
昔は紅顔の美少年であつた者も今では真白い霜を頂いた者、
すつべりと禿げた者、しかし、語り合ふと性格は昔と変つ
ていない。

人間は青年時代の性格をいつまでも持ち続けている。性
格の恒常性について、今更ながら驚いた。今は亡き友の冥
福を祈る黙祷から始まつた。若い頃の喧嘩、口論、対抗試
合での優勝の喜び、旧師の思い出話、その話の一つ一つは
温かい友情の絆に結ばれている。この世の中で、こんなに
気楽に思うことを何んでもずばり言えぬ会は外にあ
るであらうかと、つくづく思つた。それにつけても、健康
で遠い金沢からわざわざ一席のクラス会に出席できて楽し
い時間をもてた、自分自身の幸福をつくづく感謝し、懐し
い友人と再会を誓ひ合ひながら会場を出た。

(⇒)

第二の誘引力は教え子達の愛情である。

私は初めて教壇に立つたのは、昭和三十九年九月(満二十一
才)札幌市内のA小学校であつた。当時五年生の男女組の
担任で、翌々年昭和五十五年三月これらの生徒を卒業させて、
私も四月に東京の高等師範学校に進学した。この一年半の
小学校教師の体験は教師生活の内でも最も真剣で、教育愛に
燃えた終生忘れ難いものである。

その学級は男女合わせて五十余名であつた。

当時の生徒達は私の渡道を待っていてくれたのである。
昭和五年に別れて、四十年目の再会であつた。

札幌駅頭に幾人もの教え子達は出迎えてくれ、クラス会

の計画を知らせてくれた。この教え子達はこの時すでに五十二才と五十三才で、皆立派なお父さん・お母さんになっていた。クラソ会の席上で自己紹介があった。ある者は中学校の教頭、会社の社長、重役、官庁の部長、医師、商店の主婦、会社員の奥さんなどそれぞれ苦しい戦争時代を切り抜けて生きてきて来た。戦死者も数名あった。

四十年振りに会ったNさんが「先生ノお忘れになられたかも知れませんが、小学生時代もチビだった〇〇です。」と笑顔で自己紹介、ある婦人は「私は足が悪くて、体操の時間や遠足の時に先生によく面倒を見ていただいた〇〇です。」と、また、ある婦人は「私は行儀が悪くていつも教卓のすぐ下で、毎時間先生から注意されていた〇〇です。」と、そういわれると、当時の生徒について一人一人の個性・性格・長所・短所から家庭の事情まですっかり知りつくしておりそれをそのまま思い出すのであった。

私は勉強のよく出来る子どもも、あまり出来ない子どもも、金持の息子も、貧乏人の娘も一視平等・公平に愛情をもって取扱ひ決してわけへだてすることなく、楽しい明るい学級作りを精魂を傾けた。その真心は、一人一人の生徒の魂の中に今もお生きていることを確認できたような気が持がした。

そして、男子からは先生の「ジャンバルジャン」の話は、

今も心に深くきざみこまれていきますとか、歴史の時間に先生の忠臣孝子の話に皆が涙を流した思い出を語り合った。

いよいよ札幌を去る時に、多数の教え子達は駅頭まで送りに出て、先生また来て下さいねノと一人一人握手をして、涙ぐみながら別れて来た。私は教育者になってよかつたと、しみじみ感じて、札幌をあとにした。

(三)

第三の引力は唯一人の老叔父の愛情である。

世の中で唯一人の老いた叔父が苦小牧に住んでいる。この叔父は私の母の弟である。私の母は五人兄弟の長女で彼は末弟である。この兄弟は早く父親と死別したので、叔父の青少年時代は私の母が親代りとなって世話をしたと聞いている。この叔父の出身地は石川県であるが、北海道で苦学して客船の船長となり、一生涯を海の男として生き続けて来た。その間、幾人かの人命を救助したので、運輸大臣から幾枚かの褒賞状を受けている。子供は九人（女七人、男二人）の子福者であるが、この子供達を戦前から戦後の困難な生活の中で養育し、教育して現在全部がそれぞれ家庭をもって幸福に暮している。本人夫婦を併わせて一〇組の夫婦があり、一〇組の夫婦の中で一組も離縁とか死別した者はなく、完全夫婦で孫は二四名あり、一人の問題児も異常児もないという。幸福な一族である。

この叔父は本年二月脳軟化症にかかり、一時は絶望かと思われたが、現在はその病氣も恢復した。そのため、耳は遠くなっているが、他の機能は普通である。

私は子どもの頃からこの叔父のお気に入り、私が訪れると泣きながら、だきかかえて喜んでくれるのであった。今回も二日間、筆談で大学ノートに私の言いたいことを書くとい句、一旬、「うん、そうか」「そう」と微笑をたたえて喜んでくれた。

この九人の兄弟姉妹は勿論、嫁達も婿達も全く仲が良く、互いに助け合い愛情に満ちた模範的一族である。

(四)

この叔父と話している時に、古い煙草入れのケースから一枚の古新聞の「切り抜き」を出して見せた。それは北海道新聞の切り抜きである。その記事は次のようである。

「北海道に行く」と消息不明になった学友二人を探して下さい。」金沢大学 沢田忠治教授

同大学学力指導会々員の連名の手紙が三十一日、青木道警察本部長に届けられた。

「搜索費の一部に」四万円と石川県警からの手配書も同封されていた。

この二人は同大学工学部二年〇〇〇君(19)と、教育学部二年〇〇〇〇さん(18)、男子学生は専攻の「探

糸技術」の将来に絶望して、四月二十七日「あこがれの北大を見て死ぬ」と、仲の良かった〇〇〇さんを誘っていなくなった。沢田教授や学友たちが二人の写真を持つて来道、札幌、定山溪ほかを懸命に捜したが手がかりをつかめず、思いあまつて手紙を書いたという。

……

二人の両親の悲嘆と学友たちの気持をくんで道警本部はさつそく二人の発見方を全道に手配したが、同本部長も「無事できてくれればよいが」と、心配している。」

との記事の傍に二人の写真がのせられてあった。叔父はこの記事を見て、二人の無事を祈るとともに、どんなにか君は心配しているかなあノと思っていたという。これはどうなったかねと尋ねられた。

私を北海道に引きつけている第四の誘引力はこの二人の靈魂であった。今はなきいとしい教え子の御霊を弔ってやりたかったのである。

この事件の概略は次の如くである。

前述の新聞記事の如く、五年前にC君は金沢大学工学部二年生であった。彼は小・中・高校ともその地方の秀才として、成績は常に抜群であった。大学も競争率の高い工学部へストレートで入学した。

一年生時代は問題なく学業に励み、学力指導会という文化クラブに入会し、クラブ活動に活躍していた。二年生の前期の五月の連休前に突然行方不明になった。クラブの学友達は八方手をつくして行方を探した。それと同時に、同クラブの二年生の女子学生も一人不明であることがわかり、二人でどこかに旅行したのではないかと、金沢駅の学生割引券を調査し、二人の学割券が発見され、行先は札幌駅となっていた。それでクラブの学友と札幌に赴き、北海道警察本部に捜査願いを出し、二千枚のピラを印刷して配布して探したが、どうしても見つからなかった。「生きていて欲しい」とクラブ員全員と神に祈っていた。

それから一年半の歳月が流れた。

北海道は雪が降り始めた十一月中旬、北海道警から金釧時計、校章などの遺品の電送写真が石川県警に送られて来た。私と学友二人で本人達の遺品に間違いないことを確認した。

二人の死体の発見された場所は、神秘の湖といわれる支笏湖の湖畔から約一〇〇米程登った恵庭岳の麓の原始林の中である。

この支笏湖は真青で最も深い処は三〇〇米もあるという。しかも海流の如く水は流れている物凄い湖で、湖水の深い処へ落ちると死体はあがらないという。この湖水は綺麗な

ヒメ鱒（土地の人は「チップ」と呼ぶ）の宝庫である。

二人の死んだ場所は三角形に高くそそり交つ恵庭岳（札幌冬期オリンピック大会の滑降競技場になった処）の麓で湖畔まで迫っている。

湖水の反対側にモーラップという夏には青年男女が多数集る憩の場のキャンプ場があり、その後方には年中火を噴いている樽前山が見え、その右側には風不止岳（フツツンダケ）があり、夜は北極星がかがやく静寂な地、湖畔の周囲は営林署直轄の山林でトド松、エゾ松、白樺、熊笹の生え茂っている原始林で、熊も出没する場所である。その当時はそこに行く道路がついていなかった。現在は細い山路が出来ており道路の側に、時々、「熊に御注意下さい。」と、赤い立札が見られる。

死体発見の模様について、少しふれてみる。

この山中で雪は約三〇糎程積っている処を営林署の夫、数名がエゾ松の大木を伐採に出かけて、最初にC君の死体をエゾ松の大木の根元で見つけ、次いで、一〇米程降った処に、湖畔の方に頭を向けて伏した姿でY子の死体を発見したのである。

何れも熊笹の生え茂った中で、殆んで白骨化していたという。

道警からの死体発見の知らせを受けて、Y子の父親とC

君の兄と学友一人と三人で遺骨を受け取りに渡道した。

この三人は北海道の警察官、千歳市役所の方々、その他多くの北海道の人々の親切なお世話に感激し、千歳市で死体を火葬（荼毘）にして遺骨を持ち帰って来た。

金沢ではクラブの学友達は、各自のポケット・マネーを出し合って一寺院を借り、二人の合同葬儀の準備をしていた。学友達曰く、「二人は生前に結婚は出来なかった、死んだあとではあるが僕達、私達の手で結婚式を挙げてやろう。」と、心からの温い友情による葬儀と結婚式を、しめやかに且つ盛大に執行した（この事件には大学当局は一切関係しない。）

式の前夜、お通夜もあった。

お通夜には、二人の親、兄弟とクラブ員全員と二人の中心・高校時代の友人達も集って、二人の生前の思い出を語り合った。その時の話題の中心は「なぜ、死なねばならなかったか。」である。

この問題に対しては、思いつくまま、二人の生前の思い出を語り合ったが、具体的で、決定的な原因はだれ一人として見出せなかった。

それは彼の深刻な苦悩を彼からだれも打開けられていなかったからである。

彼は自分の殻の中に閉ぢこもり、悩みに苦しんでいたの

である。ただ一人C君と郷里の住宅も近くて、小・中・高校を共に学んだ親友（会社員）が次のように語った。

「彼が行方不明になる前々日に、彼の下宿を訪れて、徹夜で話し合った、その時に、彼曰く、

僕は友達や親類の人々から非常に快活で、明朗な男だと思われているが、僕の本性は決して快活ではないのだ、故意に快活を装っていたのだよ。長い間、これは苦しかったよ」と、また、僕は現在、蜘蛛の巣に引つかかった蝶々のように、十重・二十重に紐にがんじがらめにしばりつけられていて、その紐をどこからどのようにとぎほぐしていいか、そのときほぐす紐の糸口はどうしても、見出せないのだよ。」

といい残していた」という。

C君の原因と思われるものについて、クラブ員やその他の友人達の話を総合し、私は推察してみれば、八ヶ条位の要因が考えられる。家庭環境（実父なし、小学校三年生の時に気のすすまぬのにある小農家に養子にやられる。養父との折合い悪い）学費の問題、単位未終了で留年になるかも知れない（秀才のメンツの問題）自分の将来の就職の問題、続書の影響、ノイローゼ、恋愛関係、人生観の悩み、青年期の自己閉鎖性等々である。

他方、Y子については、全く死ぬ原因は見出せない。Y

子は成績優秀で、美貌で、愛らしい微笑をたたえ、だれからも好かれる明るい性格の女性であった。

行方不明になる数日前クラブ員約五〇名で新人会員の歓迎コンパが催された、その時、Y子は私の前へお酌に来て、
「今期、先生の講義を受けています、私に「優」を下さいね」と微笑していた姿が、今も目に見えるようだ、その時、
「よし」「よし」と答えてやったことは、せめてもの慰めに思っている。

彼女は田舎の旧家（昔能登の庄屋）のお嬢さんで、両親から殊の外寵愛を受け、何不自由なく幸福な生活を続け、高校まで優秀で、ストレートで金沢大学に入学して来た。

そして、一年生の時からはずもC君と同じクラブに同時に入部した。

そして二人は恋愛関係になり、C君はY子には自分の悩みを打ち開けていたであらう。

Y子はC君に同情し、誘われるままに道連れになったようである。その理由は、C君は種々の睡眠薬を持っているのを見るとY子は取り上げ、取り上げしていたという。また、北海道に旅立つ時に、金沢の駅から大阪に居るC君の兄のもとへ、弟を救って欲しいという嘆願の書面を速達で送っている。

私はこの事件に接して、部長として、部員の悩み、煩悶

の問題を解決してやれなかった微力さ、問題を打ち開けてもらえなかった私の人格、性格の未熟さと、事件に対する重い責任を痛感したのである。

更に、青年の友情の尊さ、美しさ、実行力に敬意と感謝を捧げ、殊に葬儀の準備万端、学友の弔辞は参拝者全員が嗚咽にむせんたのである。

この事件に接して、青年期の危機を感じたのである。

すなわち、青年は日夜、煩悶・苦悩と戦っていること、青年は死と同居し、常に死の恐怖におびえながら、死の誘惑を受けているものだと言った。

(四)

それで今夏の休暇中、この二人の死の場所を訪れて、靈魂をなぐさめてやりたい気持ちで、矢も楯もたまらず北海道に来たのである。「部長が慰問に来たぞ」と言ってやるために支笏湖を訪れた。

幸にも、前述の叔父の次女と三女が、支笏湖の湖畔から約四キロ山奥にある千歳金鉱の鉱山の社宅に生活しているのである。二人の夫は課長級の社員である。

この二人と共に早朝三時に起き、四時から支笏湖に小舟に乗り出てヒメ鱒（チップ）釣りに出かけたのである。

真暗闇のうちに、一人一隻の小舟に乗り、岸から五、六

メートル漕ぎ出て、釣糸をさげて夜明けを待った。湖水

は鏡の如く静かで周囲は山にかこまれ、静寂そのもの、空気がすんでおり、水は真黒で、靈氣漂い、文字通り神秘の湖である。

糸をたれる前に、恵庭岳の方向に向って、そつとかくし持って、来た花束を湖水に落し、二人の靈魂に念仏を唱えて泣きながら合掌した。

私には、チップが釣れる釣れないは問題ではなかった。

ただこの場所に来たかった。C君の顔がY子の微笑が向うの岸に見えるようだ。だんだん夜が明けて来た。左の方に恵庭岳はくつきり尖って青空に聳え立ち、右には樽前山から二筋の白煙がゆったりと立ち昇っている。

人間はタフでなければ現代に生きられない。

やさしくなければ生きる資格はない。

いとし子の御霊の前にチップ釣る。

の駄句を一句残し、二人の御靈魂の永遠に安かれと祈りつつ、支笏湖に別れを告げた。

この事件は私の大学の教官として、三〇年間のうち、最も悲しい体験であった。

合掌。

参考文献

- | | | | |
|----|---|------------|-----|
| 20 | Skinner, C.E.: Educational Psychology. 1948
Cale & Bruce: Educational Psychology. 1950 | | |
| 19 | 沢田 忠治 | 教育心理学 | 昭二八 |
| 18 | 伊藤 安二 | 青年の季節 | 昭三八 |
| 17 | 千輪 浩 | 青年心理 | 昭三二 |
| 16 | 依田 新 | 青年の心理 | 昭二五 |
| 15 | 武政 太郎 | 発達心理学 | 昭三三 |
| 14 | 依田 新 | 教育心理学 | 昭三八 |
| 13 | 依田 新 | 教育心理学 | 昭二七 |
| 12 | 教師養成研究会 | 青年心理学 | 昭三五 |
| 11 | 辰見 敏夫 | 青年心理学 | 昭四一 |
| 10 | 武政 太郎 | 教育心理学 | 昭二六 |
| 9 | 上武 正二 | 新発達心理学 | 昭三〇 |
| 8 | 山下 俊郎 | 幼児心理学 | 昭四一 |
| 7 | 金子 書房 | 教育心理学事典 | 昭三〇 |
| 6 | 小見山栄一 | 教育心理学要説 | 昭三〇 |
| 5 | 山下 俊郎 | 児童心理学 | 昭四一 |
| 4 | 沢田 忠治 | 新教育心理学 | 昭四三 |
| 3 | 大脇 義一 | 感情の心理学 | 昭四三 |
| 2 | 篠原 助市 | 新教育学概論 | 昭四三 |
| 1 | 牛島 義友 | 西欧と日本の人間形成 | 昭四四 |

- 21 Gates, A.L. : Educational Psychology. 1948
- 22 H.J. Eysenk. : The structure of human Personality. 1953
- 23 Hurlock, E.B. : Adolescent Development 1949
- 24 Hurlock, E.B. : Developmental Psychology 1954
- 25 Cale, L. : Psychology of Adolescence 1954
- 26 Garrison, K.C. Psychology of Adolescence 1955
- 27 J.M. Sanrey & C.W. Telford : Educational Psychology.
1959
- 28 Prescitt, D.A. : Emotion and the Educative Process 1938
- 29 Jersild, A.T. : Emotional Development. (Carmichael :
manual of child Psychology) 1946
- 30 Allport, G.W. : Personality, Psychological Interpretation
1937